
恋姫世界で二人旅

ものぐさ兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫世界で二人旅

【Nコード】

N5697X

【作者名】

ものぐさ兄さん

【あらすじ】

自称神に叩き起こされ目を覚ましたら友人と二人で見知らぬ空間、自称神は俺達の腐った精神を叩きなおす為の修業で異世界送りと言出し始めて。普段から悪ふざけしかない二人は恋姫世界でも悪ふざけをし続けられるのか？

プロローグ（前書き）

はじめましてものぐさ兄さんと申します、思い付きで真・恋姫†無双の二次創作をはじめてしまいました。処女作だからとはいえどうしようもない駄文ですが読まれる方は生温かい目で見守ってください。

ブローグ

老人『起きなさい』

グース力寝ている二人組の男を起こそうと声をかける、いかにも仙人という恰好な老人が。

男性A、B「グースカピー」

老人の呼び掛け等何処吹く風というように寝ている二人

老『起きなさい二人共』

先程より大きい声で、念のため耳元で声掛ける老人

「ウーン……、グースカ」

怒鳴り声の五月蠅さに一瞬魘されるがすぐに熟睡し続ける二人

『先程から何度も呼びかけているが起きないならやむを得ないな。』

ポトツ、老人が懐から取り出したスポイトで水を一人の男の耳に垂らす

「うひゃああっ！」

寝耳に水という諺が出来る位であり驚きで簡単に目が覚める男

『やっと起きたな、それにしても大袈裟な。』

「おい、このクソジジイ、寝ている人間の耳に水垂らして人を起こしやがって!」

今にも掴みかからんとばかりに鼻息荒く怒っている男、それにたいし老人は慌てるでもなくゆっくりと話をする。

『寝起きなのに何されたかよく分かったな。』

「今までさんざん人にやってきたから。」

『何でそんな強気に話すんだ恥じるべきで自慢することでないのに、まあいい、そんな駄目なお前さんを起こしたのは話があつてな。』

「俺が駄目なのは自分の事だから分かる他人に言われたくないぞ、あんた誰だよ!？」

最悪な起こされ方にイラつき全身から殺気を放ちながら話をする男

『私は世間一般で言う神で、君達は今朝死んだんだよ、大谷 保君、^{たもつ}横で寝ている上尾 司君^{つかさ}を起こしてそして教えてあげなさい。』

「はいつ・・・!？」

自称神、更に自分が死んでいるという発言に固まる大谷 保であった。

- 大谷 -

大谷が固まってから数秒が経過、あまりの事態に驚いていたが驚かされたが周りを見渡し、先程まで怒っていた思考を冷静にと動かし始める。

“ 此処は何処だ？あとなんで司と俺はこんな所で寝ているんだ？それと誰なんだこの俺が死んだ、とか神だとかいう危ないジジイは？”

周りを見渡すと真っ白な部屋、壁が見当たらず真っ白な天井と床が地の果てまで続いている、たぶん自分がいるのはそんな部屋の真ん中であると。

『 危ないジジイとは失礼な、先程も言ったが私は神だぞ、あと此処はあの世とこの世の境とでも言えればいいかな。』

目の前のジジイに思考を読まれている、自分の理解を超えている事態に頭が混乱する、とりあえずは横で寝ている友人の肩を激しくゆすりながら声をかける。

「 司、起きろ、司、なんか変な事が起きているぞ。 」

上尾 司と呼ばれる男の肩をゆすり声をかける、起こし方にコツがあるのか神が声掛けたときと違い目を覚ます。

司「 むわあ、・・・おはよう 」

大口を開けてあくびをしながら司が挨拶をする、自分みたいに驚かされて起きたわけでないからハッキリ目を覚ましてもらうまで時間が少しかかるなと思い、その間考え事をする。

自分の姿を見てみるといつものダブルのスーツにネクタイ、足元に

は愛用のブランドのスニーカーが転がっている、息が酒臭い。

自分の恰好を見て、少しずつだがいろいろ思い出してくる。

“誕生日に出張が入り一人ホテルで寝泊まりは寂しいからと、司に電話で愚痴ったら、明日東京に帰ってきたら野郎二人と絵面は良くないが飲みに行こうと誘われて。”

“そうだ、司が人気の焼鳥屋をわざわざ抑えてくれてそこで飲んで、明日は休みだし二次会、三次会と吐くまで行くぞと。”

少しずつだが前日までの記憶を思い出していく、思い出すため頭をひねる自分の姿を見てうんうんとうなずいている自称神

“ただ、そこから先が思い出せない、それで寝ていたら見知らぬ自称神という危ないジジイに驚かされ、しかも、俺らは死んだと言われた。”

二日酔いでガンガンする頭なのに、怒鳴ったり考え事したりと脳を必死に動かしたため頭痛が悪化、気分が悪くなってくる、とりあえず今は考えるよりも吐くことにした。

『若造に危ないジジイ呼ばわりされるのも癪だし、二日酔いでは話にならないし目の前で吐かれるのは嫌だから二日酔いを治してやる。』

ひとり言のように俺に向かって何かつぶやいた後、神の右手が俺の肩を触れた瞬間に気分の悪さとか一気に無くなる、ちょうど寝ぼけていた司も目を覚ましたもよう。

- 司 -

友人であり先輩な保さんが出張先で孤独と電話で愚痴っていたので、
昨晚飯を食いに行つて何件もはしご酒してから記憶がない。

「そして自分が保さんに起こされ目の前には仙人姿の変なじいさん、
保さんはじいさんを神様だという、わけわからん。」

とりあえず保さんが自分を担ごうとしているのでは？と。

「保さんの悪戯でしょ、昔自分が目を覚ましたら車のトランクに閉
じ込められていたなんてありましたし、この変な場所にいるのも悪
戯でしょ。」

「司さんよお。俺はあまり面倒なことはやらないぞ、だいたいトラ
ンクの時はお返しに俺を騙してアーっとな人専用のサウナに連れて
行つたら、危うく惨劇が？と、あの時は生きた心地がしなかったぞ。」

「30過ぎの保さんが怯えて泣き入っていたのは笑わせていただき
ましたよ、まあ本物の人に「貴方転向したらモテるのに」と上目遣
いで言われたら怯えますか普通は。」

昔の事を思い出しニヤリと笑つ、「保さんの悪戯は洒落にならない
が司のはそれどころでない」と友人達によく言われているくらいで。

とりあえず保さんが言うには目の前の爺さんは神様と、昔JR上野
駅周辺にいた「俺は暗殺拳の使い手だ」と言っていたおっさんと同
じタイプだという結論を出す。

とりあえずそういうタイプの人は否定すると危ないから優しく話を聞いてあげよう。

- 神 -

『上尾 司、君もなかなかいい根性しているねえ。』

見知らぬ人間が自分の名前を知っている、それと思考を読まれた事に驚いているようだ、ただ納得はしていないようだ。

『そちらの男と違って二日酔いではないから治してやれないが、神だと証明してやろう。』

そういつて私は右手をパチンと鳴らした。

その瞬間、辺りは真っ暗になり彼らの目の前に立体映像が流れはじめる。

何店回ったのだろうか太陽が昇りはじめる早朝の東京を酔ってフラフラな二人が歩いている。

酔っ払い二人は大通りの向かいに止まっているタクシーを見つけ、フラフラな酔っ払いのくせに妙に機敏な動きで道路に飛び出す、運悪くそこにトラックが、そして二人は跳ねられたあとピクリともしていない。

二人とも下を向いて肩が震えている、事実とはいえ自分が死んだ映像を見させられたら流石に落ち込むのも仕方無いかと。

「「なんでこんな中途半端な死に方なんだ！もつと面白く死ねよ俺！」」

神はあまりに自分の知っている人間達と答えが違ふことにポカンとしている。

- 保 -

「驚いているようだが何を驚いている、どうせ人間は死ぬのだから、ならばダーウィンアワードで表彰されるような間抜けな人の記憶に残る死に方をしないと。」

ただまあ、この映像を見て司も爺さんが神だということを納得したようだ、とりあえず話を進める。

「俺ら二人に用があつて忙しい神である貴方がわざわざ俺らの前に現れたのは何の用だ？偶然はないだろう地球には66億人以上いて毎日阿呆みたいに人が死んでいるから用もなければ確率的に俺らの前には現れないだろ？」

『少しはキレる頭はあるようだな、簡単な事だお前さん達に説教をしよう。』

「「説教？」」

見事にハモる

どうやら自分達二人は先祖代々問題児が多いらしく特に酷いのが現れると神が呼び出して反省の為異世界に送ったり更生の為修行させ

ると。

まあ俺も司も家柄的には由緒正しいのだが、家柄と反比例するかのよう先祖にろくな人間がいないのが、しかも、そんな人間が急に真人間になるという伝説が。

母方のひい爺さんはある地方の寺全てをまとめる大物だが生臭坊主で数え切れないほどの愛人と隠し子が日本中にいたくらいで。

父方の先祖ならば水戸黄門の悪役のように、偉方と結託して相当荒稼ぎした豪商だったと最盛期のころは自慢しづらい素敵な人間が多いのが。

司の先祖にしても、趣味が辻斬りなんて大変愉快な趣味を持つ武士がいたりと。

たしかにろくでもない先祖がいるが、しかも、ある日を境に急に真人間になるなんて事が言い伝えられているくらいだが。

神が言うには俺ら二人は歴代の先祖のように目に見えて悪い事はしないが人生や才能の無駄遣いと悪ふざけが酷いから少し精神を叩き直そうと。

正直余計なお世話である、だいたい悪ふざけが酷いとかおおげさである。

ハロウィーンでコスプレする際に悪魔のいけにえのレザーフェイスのコスプレを頑張ってやったら、チェーンソー片手に持った不審者がいると近隣から通報されたりしたくらいで。

司にしても、高校時代に一学期はオール5、二学期はオール1、三学期はオール5とかやって担任の胃に穴を開けかけりしただけである。

とりあえず自分的にやましい事はしていないので素直に神に

「悪い点があれば反省したい所存でございますが、当方としましては説教されるような謂れは一切御座いません。」

証人喚問中の国会議員のようにコメントをする。

そんな私の発言をたしなめたるつもりか司は罪を認めるが、ただ・・。

「恥の多い人生を歩んできました反省したいのですが心当たりがありません、今回は一体どの件についてでしょうか？」

どうやら神に止めを刺したらしい、神様の両肩がプルプルして、そして噴火。

『それら全てだっ！！』

男塾の江田島平八ばりの大音量に気絶しかける二人。

- 神 -

“駄目だ、こいつ等は既に手遅れだ、だが、こちららも神として意地がある。”

とりあえず二人には反省の旅に出てもらうしかないな。

『お前ら二人は生きる事を舐めすぎている、命の無駄遣いをしている、神への尊敬もない、だから今から罰としてお前ら二人を過酷な異世界へ送りつける。』

『お前らがその世界で更生し更に偉業を成し遂げるとか結果を出したならば、お前達の死は無かった事にして世界に戻してやる、もし嫌だと言うならばあの世送りでいつ輪廻転生出来るか分からないぞ。』

此処まで脅せばいいだろう、神の怖さを認識したな、まあ更生したら偉業は無くても元の世界で蘇らせてやろう神の懐の広さを見せつけてやるか。

まだ神は二人が予想を覆す人間であることを認識出来ていないのであった……。

- 司 -

「あの世送りにしてもらえますか特に現世に未練ないですし、あの世はあの世で楽しそうですし。」

自分の発言に対し、保先輩も考え始め、そして口を開く

「そうだなあの世送りもいいな、落語の地獄八景であつたが冷静に考えたらあの世いいかも好きな音楽家や落語家、司の好きな歌舞伎とか名人天才は皆いるんだから、辛い異世界よりもあの世ライフを

満喫した方が。」

神と言っていた爺さんが口をあぐりと開けて固まっている。

「自分達二人が生に執着すると思っていたのだろうか？神を名乗るくせに頭が悪い。」

吐き捨てるように言う。

神が震えだす、人間よりもはるかに偉いはずなのに、万物の主はずなのに遂に泣きつき始めた。

『お願いだから異世界に行ってください、異世界は異世界で大変な事になっていて、そのための手段で君達を送るつもりだったのに助けてください。』

土下座からの足に縋りつき泣き落とし、神のプライドは無いのだろうか。

『お願いします、助けてください色々と力を上げたりとか優遇しますから。』

“神大丈夫なのか、そんな事をしてこの世界のバランスは崩れないのだろうか？大体それでは修行にならないのでは？”

とはいえ、さすがに宇宙で一番偉いはずな神が涙と鼻水で顔をグシヤグシヤにして泣きついているのは忍びない気持ちになる。

保さんの顔を見ると仕方ないなという感じの顔つきでいる、保さんと目線

が合つと自分と同じ意見なのがわかる。

「顔をあげてください、そして泣きやんでくださいよ、そこまで頼まれましたら幾らふざけている自分達とはいえ。」

口をそろえて神に伝える。

「だが断る！」

時が止まる、どうやらトドメを刺してしまったようである・・・。

- 保 -

”だが断る、効果のある一撃として使いたいと思ったがここまで威力があるとは”

神がエグエグと泣きながら体育座りで左の人差し指で地面にのの字を書いているのが。

“ぶっちゃけ気持ち悪い絵面だ、女の子ならまだしもいじけているジジイなど絵にならない。”

このままでは日が暮れると思い、まあ、真っ白い空間で日が昇るも暮れるもへったくれもないんだが。

「俺も司も悪ふざけや悪戯はひどいが弱い者虐めは嫌いだから、暇つぶしも兼ねて行ってやるよその修業に。」

『嘘だ！』

神が壊れた、まさかジジイが鉈女みたいになるとは、完全に人間不信になっっている誰だこんな風にしたのは。

とりあえず説得をする散々宥めすかしたらなんとか落ち着いた模様、ヤクザの交渉術である7殴って3抱きしめる、この比率でいくやり方がまさか神にも通じるとは。

修行に行く世界は色々あるようで本来は神が勝手に決め神の代理として戦争の鎮圧をさせられるのだが、俺達に選ばせてくれるとおかしな成行きに。

トロイアやら三国志、戦国時代、30年戦争とか色々ある、戦国時代か三国志かで悩んだが、日本の戦国時代だと殺した人間が自分の先祖とかでの自分に影響があつたら怖いので三国志にしよう。

もうお腹一杯という状況なのになんか神が更に能力とか望む物をくれると言っので

ただ最初から最強は面白くないので自分の努力次第でもしかしたら最強になるかもという事で限界突破。

あと病気とかつまらない死に方したくないとにかく健康、あとは三国志の時代ならば空気を読んで銃や車はやめて時代に合った武器とか馬が欲しいと。

『努力しなくても望めば最初からフリーザくらいの戦闘力にはなれますよ、それなら異世界修行もあつという間に終わりますよ。』

修行で行くはずなんだが、なんかおかしいことを言っている、なん

で神がこんな壊れてしまったのだろうか……。

『成長限界突破でも鍛え抜けば武なら範馬勇次郎、知らんヤン・ウエンリーを超えます、健康はヘルシングのアンデルセン神父くらい再生すればいいかな？』

『武器と馬は使える体力がついたら頃に届くようにします、武器はその時に欲しいものをオーダーしてくださいロングノースでもなんでも、馬は原哲夫作品の馬程度でいいかな。』

名目上俺と司の修行であり、神の代理で紛争の鎮圧に行くが、いくらなんでもアンデルセンの回復力やら聖槍とか貰うのは、私が神になり替わりたいのではないのだからほどほどにしてくれと頼む。

とりあえず、なんか妙にこちらを優遇する神との打ち合わせも終わり、神が指を鳴らすと突如どこでもドアらしき物体が現れる。

扉の前に立つと色々な思いがわき出る。

“この扉をくぐると遂に三国志か、か任務達成まで戻れないどころか死ぬかもしれない、だが面白さを求めていきますか。”

横を見ると無二の親友である司も笑顔でこちらを向いている覚悟はできている模様、深呼吸をして息を整え心を落ち着け覚悟を決め扉をくぐる二人。

まさか、扉をくぐりもう戻れない状態になってから神が俺達に肝心な事を伝え忘れていたと教えられるとは思ってもいない二人だった……。

プロローグ（後書き）

プロローグが長くなりすぎた、そうでなくても駄文なのに、さてどうなりますかこの小説は、作者のくせに何も考えていなく不安であります、どうしましょう。

第一話、転生したはいいけれど（前書き）

とりあえずプロローグに続いて第一話を書いてみました。

どうしようもない作品ですが、もしお暇なら生温かい目をして読んでください。

第一話、転生したはいいけれど

—保—

「話が違う、いや、話が違うんではない、もっと考慮しろと言っべきか・・・」

いきなり何がと思われるだろうが、今の俺の心情としてはこうしか言えない。

申し遅れた、俺の名前は太谷 たもつ 保33歳、会社役員だった。

東京近郊のとあるベットタウンで数百年前から先祖代々商売をする金持ちの息子で、

まあ変わり者の両親の元で人並みではない体験をしながら元気に育ち、

変わり者ではあるが優秀な両親の血を引いたのもあり努力らしい努力をすることもなく苦労もせず良い大学に行き。

卒業後は父の会社に入社、当初は親の七光と言われたりもしたが仕事も順調にこなし、

後継ぎという点もあるが今や最年少取締役、次期社長として働いている。

まあ親族からは会社を背負ってたつものだから三十過ぎて結婚してないのはいかん、

と小言を言われるのは不満ではあるが、それ以外とくに主だった不満はなく。

不平等な世界だが私は運良く皆と違ってイージーモードでお気楽ライフを堪能していたと。

そんな順風満帆な生活だったはずが・・・。

無二の親友とご機嫌に飲み歩いていたはずが変な場所で目覚めて、現れた神にお前達は死んだと言われ三國志の世界に行く羽目に。

まあ、ここまでいい。

普通の人ならば「死んでるのにいいのか!？」とか言われそうだが、人生イージーモードは面白みがない、ならば波乱万丈の方がいいと。

あつ、今さら言うのもなんだが、誰に対して説明している文章なんだって突っ込みは無しで。

転生とか喜んでいるはずなのに何で戸惑っているのかといったら、まあ切実な問題が。

過去に行ける扉をくぐったら意識を失い、目を覚ましてまず最初に視界に入っただのは、

サッカー中継時の川平慈英並みにハイテンションな見知らぬ男の笑顔がドアップ。

目を覚ましたら、いきなり川平慈英はびびるぞ。

川平もとい、男のテンションの上がり方と「董家の跡取りが」「君に似て可愛い顔立ちだ」

などの会話の内容で、この男は父親なんだなと理解した。

転生させた神に問題として言いたかったのは、何故赤ん坊からなんだ！と

まあ前世である30歳過ぎたおっさんが異世界で修行だと鍛えても、年齢的に脳細胞も体も衰えていく一方、ならば若い頃からやりなした方がいいのはわかる。

だが、生まれた直後から私の自我があるのはなんとかならないかと、鼻水垂らすまで説教したい。

赤ん坊ですよ、自分でトイレに行けるわけなくオムツにお漏らしをする、

赤ん坊なら当たり前ですがこの前までおっさんな私としては常識でおもろしはできない。

あと母親だけでなく侍女達にオムツをかえられる羞恥プレイも精神的ダメージが。

しかも、恥ずかしいというだけでなく、オムツを人にかえられる恥辱が、

何か新しいものに目覚めてしまいそう、堕ちてしまいそうな恐怖に耐えるのが・・・。

せめて3歳位になってから自我が目覚めてくれればよかったのだが。

あと、もう一つ問題が、神が転生させる際に記憶や能力引き継ぎしてもらったことで。

私は赤ん坊らしく起きて寝てを繰り返す、そんな私が父親と初対面

した時に事件が、
ハイテンションな父親の話し声に目を覚まし、前世での生活のように起きてしまう、
問題は私が生まれたばかりの赤ん坊であるというのが。

寝台から上半身を起こし背伸びしながら「とおしゃん、かあしゃん
おはよう」と、
舌足らずながらも普通に挨拶してしまった。

自分で、あつ、と気づいた段階で手遅れでしたよ。

赤ん坊ではあり得ない姿を見て両親はわなわなと震えだしたと思っ
たら、

父はいきなり窓から「うちの子は神の子だ――！！！！！！」な
どと、

近隣住民から頭を疑われるような事を叫びだし、
母親はあまりの出来事にフリーズし、侍女達は俺の姿を見るなんて
畏れ多いと皆ひれ伏しているのが。

これはまずい、と既に手遅れだがそのあとは普通の赤ん坊の振りを
して過ごす、
まさか転生して初日にして既に普通の赤ん坊の振りする生活に気疲
れするとは。

どうしてこうなったと赤ん坊ながらため息をつく生活を送るように
なるとは。

――？？？――

妻が妊娠したと知ってからいつ生まれるのだと仕事に手が付かず、一日千秋の思いでいたが、ある日執務室で政務に励んでいると我が子が遂に産まれたと待ち望んでいた報告が。

仕事を投げ出し、従者を振りきろうが構わんと走って我が子に会いに行く。

出産に疲れ寝台に休んでいる妻、産婆や侍女達には悪いが我が子と喜びの対面をさせてもらう。

妻と一緒に寝台で寝ている我が子のなんと可愛い事か。

「お前に似た可愛い顔立ちだ、将来はモテるぞ」と妻に向かって話しかけると、

妻は微笑みながら「私よりも貴方に似ていますよ、賢い顔つきなところとか」と。

侍女達は「旦那様の聡明さ、奥様の美しさを兼ね備えた将来が楽しみな若様で。」と嬉しい事を言ってくる。

照れ臭いのをごまかすためではないが産まれたばかりの我が子に、「お前は父である私に似て賢く母に似て美しいとの事だぞ。」と語りかける。

妻は「あらあら」と言いながら微笑んでいる、なんと幸せな光景だろうか。

まさか、寝台でスヤスヤと寝ていた我が子が目をパチリと開いたと

思ったら、
上半身を起こし背伸びをして「とうしゃん、かあしゃんおひゃよう」と。

首が座っていないどころか数刻前に生まれたばかりなのに、起き上がって喋った……。

我が国の遙か西で釈迦という王子が生まれた直後に歩いて

「天上天下唯我独尊」と傲岸不遜な言葉をしゃべった逸話があるのを聞いたことあるが、

我が董家の跡取り息子も釈迦ではないが選ばれし子供なのだろう。

自分の息子の持つ神々しさについて興奮して窓から

「うちの子は神の子だー！！！！！！！！」と叫んでしまった。

近所から生暖かい目で見られるだろうが私は気にしないぞ。

――保――

転生してから二週間たちました、そんな故大谷 保（享年33）ですが

「……暇だ、とにかく暇だ」

体は赤ん坊なんだが体力とかは大人ですよ、周りを驚かせないようにするために赤ん坊のふりをした生活に疲れる。

おっぱいを飲む、おむつの中に漏らす、泣く、寝るしかない。

両親や侍女の会話を盗み聞きすることで我が家がどんな家か自分の名前や現状を推測したりもしたが。

とにかく暇だ。

話し相手がいればいいが話し相手がいない、まあ話をするわけにいかないんだが、

侍女に話かけたらまたパニック起こされ土下座しそうで。

とはいえ、読書やゲーム、仕事とか暇潰しが出来ないのだからせめて気分転換で会話がしたい。

『じゃあ私が話し相手になろう。』

聞き覚えのある老人特有のしゃがれた声が脳内に響く。

「この声は私の頭痛の原因を作った自称神、こと、クソジジイ！」

『自称ではないクソジジイでもない本物の神だ！まあ声出さないでいいぞ思念で会話しているから。』

助かった、自分以外誰もいない部屋で喋れないはずの赤ん坊が一人で会話していたら、

そんな姿を、もし侍女達に見られたら神童どころか悪魔憑き扱いだ。

悪魔憑きなんてなった日には老いた神父と若い神父が家にやって来るよ、

私が緑色のゲロ吐いて、ブリッジしながら階段を降りたわけでもないのに、

悪魔扱いされたりしたくはない。

『懐かしの映画の話はどうでもいい、どうだ転生しての新しい人生を楽しんでいるか？』

私の転生してからのストレスを知らないのかと舌打ちしてしまう、大体生まれて1年もたっていないのに何を楽しむんだ！と言いたい。

あと、この前散々私達にへこまされたばかりなのに、なんで今日はまた上から目線なんだと突っ込みたい。

とりあえずはいろいろ突っ込みたい事があるので一気に突っ込む。

「三国志の時代に転生といったが此処は何なんだ！？変な世界に送り込みやがって！

両親が董君雅と池陽君だから俺が董卓の親族はわかる、なんで両親の性別がひっくり返っているんだ！！！！」

「それと董擢ってなんでこんなマニアックな武将に董卓の兄貴で早世したしか情報が無いような、

知っている俺も俺だが、普通三国志なら魏呉蜀とか王道な所に所属するのが沢山あるのに何で非主流な。」

「一番の問題は、一緒にこっちの世界に来た司ちゃんがなんでいないんだよ、転生なら双子とかじゃないのか？」

私がまくしたてるように一気に疑問をぶつけると、神はゆっくりと答えます。

『君達が知っている三国志は正史と呼ばれるもので、今、君がいる

のが外史なんだ、

外史とは一言で言うならIFの世界じゃ、もしかしたらこんな世界があるのではという。』

『何故外史にしたのかは君達が戦国時代を選ばなかった理由と同じじゃ。』

「過去の正史だと正史の歴史を変えてしまう事で未来の俺達に影響する可能性が、
ならばそれがないに外史にということか？」

『そうということじゃ、だからお前さんの認識している三国志とは性別や性格とかが違う世界なんじゃよ。』

「それはまあわかった。」

『董擢にしたのはたまたま空いていたからだ、先程も言ったがここは外史IFの世界であり、
外史に正史ならいるはずの人間がないなんて事も、その中で空きがあった人物だからじゃ。』

「そんな理由なのか。」

『あと、お前さんが曹操とかに転生したとして正史での曹操の行動を思い出しては行動しづらいだろ、
これだけ資料がない人間ならば好き勝手やれるだろうと気を使ったんじゃないぞ・・・。』

・・・の部分に何か別の意思が隠れていそうだ、面白そうだからとか、この前の意趣返しだとか。

「どうも騙されている気がしてならないんだが。」

『疑り深いのう、あともう一つの質問の答えだが、お前の相方である上尾は、

お前と同じ日に転生はしている、この外史でちょうどいい双子に空きがなくて別々になったんだ、

まあ、お前さん達ならばすぐに会えそうじゃが。』

「無事ならばよかった、あいつと俺は前世で義兄弟の杯交わしたんだからな。

生まれは別々でも死ぬ時は別々だと誓い合った仲なんだから。」

『それを言うなら生まれは別でも死ぬときは一緒だろ、じゃろ。』

「落語の粗忽長屋だ元ネタは知らないのか神のくせに、まあ俺達は一緒に死んだが、

普通一緒に死ぬなんてないだろ何寝ぼけた事を言っているんだ。」

まあ、色々言っではいるが司が無事だと聞いてとりあえずは安心する、が釘は刺しておこう。

「こつちに二人まとめて来たんだから司と会えないでどちらか死ぬとかなんてなったら神だろうが許さないからな。」

『まあ平気じゃよ、そんな心配しなくてもあいつは色々と赤子生活を楽しんでいるぞ。』

「嫌な予感がするからあまり聞かない方が良さそうだが、一応聞いておくか。」

聞かない方が良さそうだが好奇心に負けてつい聞いてしまった。

『ブツダの真似して生まれた直後に三歩歩いて天上天下唯我独尊と言ったり、

侍女にオムツを変えられるたびに「はあはあ、抵抗することもできず他人にオムツをかえられ、

恥ずかしい姿を見られる自分の無力さが、背徳感が堪らない、なんで今まで赤ちゃんプレイに興味なかったんだ！」力説していたぞ。』

て、手遅れだったか……………。

とりあえずまあ、疑問は解消されたかな、と思っていたらまた話をしようといって神の声が聞こえなくなる。

赤ん坊であるおかげと最近の気づかれのせいかな、とりあえず親友の司の無事がわかった安心感、

彼が誰になっているのか、いつ会えるのかを気にしていたら俺こと董擢は眠気に襲われたのだった。

第一話、転生したはいいけれど（後書き）

読みづらい文章ですいません、感想とかありましたらよろしく願
いします。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（前書き）

恋姫のはずなのに、時代設定が少し古いからとはいえ劉備も曹操も誰もまだ出ません、ごめんなさい。というかもう一人の主役を出せていない大丈夫なのか……。あと、今回も無駄に長くてごめんなさい。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？

- 保 -

どうもこの三国志の世界に転生して3年たちました姓は【董】名は【擢】字を【孟高】

そして真名は前世での名前と同じ【保】になりました、故大谷 保こと、

董卓の兄貴で早死に以外は売りがなく、三国志で劉備や曹操といったスーパースターと異なり、
刺身でいうならツマ以上に需要がない董擢です。

いきなりキンクリして三年たっているのはまあ色々とお察しく下さい。

話を本筋に戻しましょう、三国志の世界でなどと言いましたが神の説明を受けた時に知りましたが、

此処は私や皆が知っている正史というものではなくIFの世界である外史という事だそうで。

三国志では姓名以外に字があるのは常識として知っていますが、今の私ならば【保】という、姓名や字とは別に真名という物がありまして。

この世界を知らない私からしたら真名があると知ったところで最初は“面白いもんだIFの世界は”程度の認識でしたが、そんな生易しい物ではなかった。

真名は命よりも重い扱いでたとえ相手の真名を知っていても呼ぶ事

は許されず、
当人の許諾無しで真名を勝手に呼ぶと首をはねられても仕方がない
と注意が必要なものだなんて。

実際これで一度痛い目にあっておりまして、真名の価値をまだ知らない私は気楽に、
いつも身の回りの世話してくれている侍女の方達に真名を預けたんですよ。

問題は私が太守の息子で、しかも生まれたその日に「父さん、母さんおはよう」

なんて言葉を習ってもいないのに、普通に背伸びしながら言っ
てしまふ神童扱いですから、

侍女の方たちからしたら天上人から真名を許されたというような
状態で驚きと感動で皆卒倒しまして。

私は何が起こしたんだパニックを起こしながらも侍女達を助けようと
必死で呼びかけている、

そのような事態になっていると知らないで太守としての政務を終え
た母上が私の部屋の扉を開ける。

「キヤアアアアアアーーーーー!!!!!!」

私をいつも温かい目で見つめていて常に落ち着いている母上がこの
ような悲鳴を上げるとは。

ドラえもんがネズミを見つけてしまった時並みのパニックです、地
球破壊爆弾を使いかねません。

まあ私は腐っても太守の息子VIPですから、部屋がそんな風にな

つていたら事件か？

暗殺者にでも襲われたか？と思って母上がパニックになっても仕方ないかと。

30分後、侍女達も復活、私と侍女達から事情を聴いた母上がこちらを向いたと思ったら、

「孟高そこに座りなさい」と普段の母上の姿から想像つかない怒りのオーラが。

これは洒落どころではすまないなと本能で察しましたが、察した段階で既に手遅れ。

床の上に正座させられ説教ですよ、しかも、母の背中には怒りのオーラが見えるが、

一番きつい怒鳴るのではなく静かに淡々と理を持って目を見据えながらの説教なのが。

「貴方は三歳とは思えないほど聡明であり、誰とも分け隔てなく接する優しい自慢の息子ですが、

董家の長男として、いえ、人として真名の重みを理解していない事に私は情けなく思います。

貴方の【保】という真名は、大陸の平和を保つ偉大な人物になってほしいから・・・以下略」

どれくらい時間がたったのでしょうか、青っ洩垂らしてしまうところでなかったですよ、

こちらの世界では三歳ですが、精神年齢三十六歳であるおっさんな私が泣きそうになりました。

家族での夕食時に父はその事件を知り「さすがの神童も形無しか真

名に関しては次から気をつけろよ」

と笑って、慰めるため私の頭をクシャクシャとなでてくれました。

ただ、その父上の行動が甘やかしているように見えたようで母上の逆鱗に触れてしまったらしく。

「貴方少しお話があります」と一言、無表情ながら凄まじい怒気を漂わせた母上、

耳を引つ張られ連れだされる震えあがった父親。

連れ出される父はたぶんドナドナで売られる牛よりも悲しい顔をしていたのが・・・合掌。

母上は部屋に戻ってきたが父上が戻ってこないで部屋に見に行くと、

うつろな目をして部屋の隅で体育座りして涙ぐんでいる父上が。

この件があつてから私は両親だけでなく従者達と真名を交しなさいと母上が許可をされました。

ただ従者の方達は真名で呼んでくる事なく「孟高様」「坊ちやま」としか呼んでくれず、

また私も皆さんにおしめを替えてもらったりしたりと育ての親でもあるので、

真名で呼ぶよりも字にさん付となってしまうてますが。

決して、真名の件での母上の説教がトラウマになってしまい、

真名の取り扱いに悩んでいるわけではないですよ・・・たぶん。

前世では怖いもの知らずと言われた私が説教くらいでトラウマなん

てなるわけが・・・。

ちなみに母上の真名は【和】^{なこみ}と、私の保と同じく平和を願ってつけられたそうで、

五胡との争いで亡くなった祖父が、いずれは五胡とも手を取り合い平和を築こうとした事からだそう。

その事を知ってから自分の【保】という真名の重みが三歳児ながらずしりと両肩にかかるのが分かりました。

父上の真名は【空】^{くう}無限の広さを持ち一面に広がる空のような広い心を持つ人になれと、

祖母に名付けられたようです、ただ父上はお酒を飲んだ際にごくたまに悪酔いするのですが、

その際「世間で私の存在が空みたいなものだから真名が空なんだよ」とうつろな目で呟く事が。

私の精神年齢より若いはずの父上ですが、たまに妙に黄昏ているのは何か嫌な事があったんでしょう。

- 和 -

私の自慢の息子である保君が可愛くて可愛くて仕方がない。

保君は生まれてすぐに「父さん、母さんおはよう」なんて言っけしもう天才児だ、

あの時あの人窓から「うちの子は神の子だああ」と叫んでいた

がその気持ちがよくわかる。

昔馴染みの友人達が遊びに来た時にも気づくつついつい何刻も息子
自慢をしている私が、

最初は皆「親馬鹿にも程がある、まあ自分の子供に対してはどうし
ても親馬鹿になるがね。」

皆実に失礼である、保君の凄さを知らないで親馬鹿という言葉で片
付けるなんて、

彼らの愚かさが嫌になり少しO・H A・N A・S H Iしないといけ
ないと思うが、

さすがに太守とかを壊してしまうわけにはいかないので、保君と話
をさせてみる事に。

「まさに神童」「麒麟児とはこの子の事か」「天は二物も三物も与
えたか」と話をする。

私塾時代の同級生であり私などとは身分が違うのだが分け隔てなく
私を可愛がってくれていた劉表様なんか、

「この国を支える人材を育てるための私塾をつくる予定なのだが、
是非孟高君を入学させたい」

「いや、私塾の有無など関係無く、私の元で徹底的に学ばせてみた
い、是非私に預けてくれ」と言いだす程に。

大事な大事な愛しい保君と離れ離れになるなんて出来るわけがなく、
あまりにもしつこいので、最近愛刀が血に飢えているので愛刀の錆
にしようかと、

ふと気づいたら横にいたあの人在必死の形相で私を羽交い絞めに。

ただ人を育てる事が好きで優秀な学者でもある劉表様に、まだまだ

幼子である保君が、
ここまで惚れ込まれたのは親として嬉しくもある。

いくら褒めても褒め足りないが、保君が神がこの世に遣わした者であるとは何度思ったことか。

普通ならまだ立つこともおぼつかないような歳である保君に、軍師でもあるあの人が、

「生まれてすぐに喋ったくらいの天才なんだから保君には早くから勉強を教える」

と言い出した時はさすがにまだ早過ぎると思ったのだが私の予想は見事に覆された。

保君は三歳にして読み書き、四則計算が出来るなんて。

だがこれで驚くのはまだ早く、保君の勉強についてあの人の言葉を聞いて更に驚かされた、

あの人が用意した教材が論語、五経、管子、孟子、荀子、戦国策、呉子、孫子というのは。

読み書きの時ほどのあり得ない速度ではないが、とはいえ保君は少しずつだが、

噛み締めていくように少しずつだが本を読み着実に理解していつてるとは。

軍師という物は知識がただあればいいのではなく、大事なのは実戦でいかにそれを生かすかだが、

知識だけならば保君はあと数年もすれば大陸で並ぶ者はいない偉大なる知者となるであろうと。

ただ、最近は保君を見る度に親として寂しくなってしまう自分がいる、

三歳なんて世間の子供はもつと親が恋しいはずなのに、保君は平気なのがとても悲しい。

一昨日も大好きな保君と一緒に風呂に入ろうと言ったら「母上恥ずかしいです」と断られてしまった、

たぶんこれが反抗期というもののなだろう保君の言葉に衝撃を受けた私はその晩枕を涙で濡らした。

あの人はそんな私を抱きしめの頭を撫でながら「保もお前が大好きだから平気だよ」

と慰めてくれた、大好きなあの人に撫でられ少しだけ安心したが何故だか怒りがわいてきた。

そう、私は太守の仕事で忙しく、あの人も軍師として忙しく夫婦共に忙しい、

あの人がそれでも保君の勉強のため時間を作っているのは分かる、でも

保君に勉強を教えたりと一緒にいる時間が夫婦で私より多いのが許せない。

気付いた時には「貴方なんか大っきらい」と叫んで本気の正拳突きでぶっ飛ばしていた。

- とある場内警備兵 -

真夜中の城内警備していた時の出来事です。

最近の街の治安の良さ、しかも、この警備厳重な城に忍び込む不審者なんていないだろうと思い、

董君雅様に見つかったら気が緩み過ぎと大目玉でしょうが欠伸をして、

早く交代の時間にならないかと見張りをしていた時に事件が起きました。

「貴方なんか大っきらい」という董君雅様の叫び声が聞こえたと思ったら、

庭園から雷でも落ちたのかと思われるようなドカーーンという大音量が。

何事かと城内の警備兵が庭園に走ると、壁には大穴がそして庭園には謎のボロ雑巾が。

まさかボロ雑巾が筆頭軍師である池陽君様だとは。

翌日から城の機能が止まりました、全身打撲で池陽君様は絶対安静、執務室では董君雅様が

「保君が反抗期だなんて、保君に嫌われたらもう生きていけない」と泣くお姿が。

このままでは政務が進まないどころではないと侍従、家臣一同で董擢様の部屋に。

ため息をつかれ「両親が迷惑をかけてすいません」と深々と頭を下げ執務室に向かわれる董擢様、
ため息のつき方といい謝り慣れしていることといい、この方は本当に子供なのだろうかと思える。

とはいえ董擢様はやはり三歳児執務室で泣き続ける董君雅様に抱きついて、

「母上大好きですから泣かないでください」と董君雅様の頬に口づけされました。

この後まさか冷静沈着で有名な董君雅様が飛び上がり叫ばれるとは、

「ヒャッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これではあと100年は戦える！！」

と叫んで机の上に山と積まれた竹簡をあり得ない速度で処理していく姿が、

まさか「来年からこの記念すべき日は保君記念日として休日」と言い出し始めたのは。

あと董擢様が母親の変わりように引いていらっしまったのが印象的でした。

少し転職を考えてしまう一日でした。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（後書き）

主人公の両親や祖父の設定はオリジナル設定です。
それにしても董君雅何故ここまで壊れてしまった。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（前書き）

両親がというか、和がどんどんおかしくなっていくどうしてこうなった・・・。

書いている私が何故こうなってしまったんだと悩むのは既に手遅れか。

とりあえずこんな作品ですが読んで笑っていただけたなら幸いです。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた

- 保 -

最近の母上が怖い保です。

こちらの世界で両親が私を愛してくれているのは分かります、ただ、愛が溺愛と言いますか、ヤンでいるのが。

この前、両親共に仕事だったので鍛錬の為に城内を駆け回ったりして、

全身汗と泥まみれになって帰ってきた私を見て、

太守の仕事で忙しいのに私とお風呂に入ろうと誘ってきましたよ。

この世界での私の生みの親です、私も前世でそれなりに女性経験もありますよ、

とはいえ、妙齢な母上にお風呂で全身洗われたりするのには恥ずかしいですよ。

あと私とお風呂に入るため明らかに太守の仕事を途中で放り投げているのが。

「母上恥ずかしいです」と断ったのだが、まさかあんな風になるとは。

羌族が攻めてきたと報告が上がり城内は騒然というような事態になっても、

常に冷静沈着、将とはかくあるべきという姿を見せつける母上が。

皆さん見た事ありますか妙齡の女性が「うわーん」と、
漫画みたいな声あげて泣いてダッシュしていなくなるのが。

しかも、その日の夜中にも事件が、父上の方が私と一緒にいる時間
が多いという理由で、

まさか母上が嫉妬でギャラクティカマグナムを父上に決めお空のお
星様にしそつになるなんて。

危うく私はててなしごになるところでしたよ。

翌日も「に嫌われたらもう生きていけない」とずっと死んだ魚のよ
うな目をして呟き続けていて、
あまりにもなので「母上大好きですから泣かないでください」と頼
にキスしたら復活ですよ。

ただ、

「ヒヤッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これ
で私はあと100年は戦える！！」

なんだろうこの差というか寒暖の激しさは、
これが熱帯魚の水槽だったら中にいた魚は一瞬で全滅しますよ。

しかも、この日を記念して保君記念日成立させるとか言い出すしま
つ、どうすれば。

三歳児ながらまさか胃がキリキリと痛くなるとは。

将来旅に出るつもりですが、伝えたら私を座敷牢に閉じ込めるくら
いはするでしょう。

例えば私が結婚するとなったならばどうなるんでしょうか、
太守の息子ですし普通ならばお見合いとかでしょうが、嫁さん候補
が現れたら……。

「お前にうちの息子はやらん」「お前にお義母さんと呼ばれる筋合
いはない」

なんてドラマのようなセリフが出てきそうなのが。

いや母上の事だから刃傷沙汰になるか、将来一体どうすればいいの
か……？

後に「保君のお嫁さんは私だ」と斜め上どころではない回答が飛び
出すの知らない保だった……。

- 和 -

「……ふう」

ため息が止まらない、保君と一緒にいたいのに仕事が多すぎる、
いつそ太守を辞めようかという考えが頭の中をちらつく。

こうして私が頭を悩ませながら必死で竹簡の山を片づけている間に
あの人は。

保君に勉強を教えるという大義名分は分かるが、でも保君を独占出来るなんてうらやましい。

なんとか太守として忙しい私が保君と一緒にいられないかと考えるが解決の糸口が見えないのが。

保君成分を補充する為私の仕事中は保君を膝の上に置いて仕事する。

実に素晴らしい案だと思ったが、これは駄目だ仕事にならないのが、保君を抱き締めてクンカクンカして仕事しないで一日が終わる、そんな様子が想像出来てしまう。

どうすればいいのか頭を悩ませながら竹簡の処理をしている、とある竹簡に目にとまる。

軍に関する物で、新兵の錬度が低く訓練の相談に関する物が。

これだ！！！！閃きました。

君主自ら新兵の訓練をすれば、兵達も気を引き締め訓練に力が入る。

保君は体を動かすのが大好きらしく毎日自己鍛錬ですと言っても、空いている時間城内を走り回っていたりしている。

それならば少々早いが保君を予備役軍人という事にすればいいんだ、太守である私が保君に付きっきりで訓練指導を出来る、

保君は鍛錬が出来る、一石二鳥、完璧な計画だ。

それに予備役ならば、新兵の錬度の問題はあるが現在兵数に問題が

ないから予備役招集はない。

よし善は急げ、今日は時間も遅いから無理だが明日から私自ら新兵訓練をしよう。

完璧な計画だったはずなのに

まさか計画初日にして「君雅様は擢様に付きつきりで新兵の訓練を一切見ていない」と陳情書が来るとは、しかも「三歳の子を予備役にするなんて何考えている」と空に怒られた。

うう、保君と私を引き離そうと皆が意地悪をする……。

- 空 -

最近の妻である和の暴走が怖い

保が可愛いからすこしでもいいから一緒にいたいという和の気持ちは良く分かる、

私だってこんな竹簡全て投げ捨て、和と私で保と手をつないで家族三人で出掛けたりしたい。

だからとはいえ、三歳の保を予備役軍人とするなんて非常識にも程がある、

しかも太守自らの新兵訓練と言いながら保と二人つきりにいるなん

て羨まし、もとい情けない。

太守の職をなんと心得るのか、まあ和のそんなところも可愛いんだが。

和と結婚することが決まったあとなんかも「空と一緒にでないと仕事しません」

なんて泣きながら言い出して、あの時の和の泣き顔が可愛くて可愛くて。

和を抱き締めて泣きやませてあげたんだが、あまりに和が可愛くてお姫様抱っこして部屋に連れて行って、ふと気づいたら翌日になっ
ていて。

義母様と顔合わせたら「若いっていいわねえ」とニヤニヤされてい
て照れ臭かったのが。

うーん可愛い妻の願いも叶えてあげたい、でも、妻の泣き顔もちよ
っと見てみたい、

軍師として頭を悩ますばかりである。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（後書き）

もう一人の主人公である司を早く出したいのだが、今のままではいつになるのやらと頭を悩ませています。皆さんからしたら作者である私が何を言っているんだということでしょうが。

司ですらいつ出せるかならば、恋姫キャラとなった日には、不安です。

第四話、運命の出会いしちゃった？（前書き）

話の展開が強引すぎるかなと、まあ常に悪ふざけだからいいやといったちゃいました。四話目にしてやっともう一人の主役を出せたとは。

第四話、運命の出会いしちゃった？

—保—

たぶん、今世界で一番の大根役者である董擢こと皆の保君です。

いきなり大根役者って何があったのかと言いますと、

本日、母上と父上が若かりし頃に学んだ洛陽の私塾時代の仲間の李さんという親子が、

洛陽のエリート文官だったのに涼州くんだりまで仕官しにやって来たんです。

実は今この李さんの後ろに立っている息子さんが、遂にやって来ました転生仲間！

マイソウルブラザーである前世名でいう故上尾 司君ですよ。

3年以上ぶりの感動のご対面、かということ、意外とあっさり丸鶏塩ラーメンという感じでした。

だって、三日前に神との念波での雑談で教えられていたので。

「三日後に司がそっちに行くから、お前さんの親の友達の子として見た目は違うがお前さん達ならばお互いに一目で分かるよ、まして良くも悪くも董卓に馴染み深い名前じゃからのう。」

董卓に馴染み深いという言葉に一抹の不安を感じますが、遂に司ちゃんに会えるのが、離ればなれになっていた大親友に会える。

あまりの嬉しさに毎日まだかなまだかな学研のおばちゃんまだかな状態です、

まあ、学研の奴やったこと無いのでまだかななんて思ったこと前世で一度もないのですが。

前日の家族揃つての夕食の際に母上から伝えられた際も知らないふりの演技しましたが、

「明日、私達夫婦の私塾時代の友達の親子が仕官しにやつてくるのですが、

保君は良い子ですから平気でしょうが同い年の子供だからえばったりしないで仲良くしてあげるんですよ。」

はい、平気ですよ、生まれ変わり仲間て前世からの飲み仲間ですのてなんて言えません。

で、当日

私も呼ばれて玉座の間で董家ファミリーや家臣一団と御対面ですよ。

やってきた司ちゃんのお母さんが色々突っ込みがいのある格好で。

何故この三国志の時代にタキシードがあるのでしょうか？

なんで李さんは女性なのにオールバックで光り輝く真っ黒なタキシードなんですか、

宝塚の男役なのでしょうか？今から歌いだすのですか？

あと神のヒントである董卓に馴染み深い者で李という姓に大変嫌な予感がして仕方ないです。

「この子は私の自慢の息子で、ほら自己紹介しなさい。」

前に出てきた司ちゃん

「僕は李儒文優と言います、これから母様共々宜しくお願いします。

」

久しぶりの司ちゃんの声と普段と違う喋りについてニヤツとする。

まあ私も昔は「俺」司ちゃんなら「自分」と読んでいたがお互い親に強制されたなど。

それにしてもあの【李儒】ですよ、弘農王を毒殺しようとしたり三国志のいぶし銀な悪役、

神にこの大陸の戦乱をおさめる言われたが董家に李儒、うん、弟で董卓が産まれたら司ちゃんと二人で洗脳・・・、教育するしかないか。

とりあえず司ちゃんと話がしたいので、なんとかしますか。

私専用の巨大な椅子にちょこんと座っていたが椅子から降りて、司ちゃんの前に立ち右手を差し出し、「私は董擢、君と友達になりたい。」

うん、大根役者にも程がある演技だ、まあ一応三歳児だから平気だろう。

「はい、僕なんかで良ければ友達になって下さい。」と手を握ってくる司ちゃん

互いの親達は子供どうし仲良くなれそうで良かったという顔していたが、

私と司ちゃんの二人はお互いの演技の酷さに吹き出しそうだったな。

――司――

チャッチャチャー♪チャッチャチャー♪チャッチャチャーチャッチャ
ヤラーラ♪

BY特攻野郎Aチームのテーマ曲

「李儒文優 真名は司 陰謀の天才だ、弘農王だつて毒殺してみせ
らあ、でも献帝だけは簡便な！」

「司ちゃんいきなりどうした？その言い方なら俺がフェイスマンか
とりあえず言ってみるか」

「いや電波を受け取って言っただけで保さんがわざわざやらないで
も。」

「俺は董擢孟高、真名は保、自慢の可愛さに涼州の民はイチコロさ、
ハッターかまして
オヤツから涼州馬まで何でも揃えてみせるぜ！三国志に合わせると
こんな感じか？」

「いいと思いますよ、いや、保さんがハンニバルでしょ、なんでフ
エイスマンなの!？」

「リーダーには似合わないから董卓が生まれたらあいつ偉くなっ
たんだからハンニバルにするか、
問題はモンキーを誰にするか？頭がぶっ飛んでいるメカの天才だか
ら……。」

とりあえず特攻野郎Aチーム談義はいいや話を戻そう。

“もう一人の主人公なのに四話目にしてやっと出番が来るってふざ
けるな！作者出てこい”

と誰にだか分からないがとにかく叫びだしたいこと故上尾 司です。

話はほんの30分前、玉座の間でのご対面に戻りまして。

転生から別れて3年8ヶ月と14日ぶりに、ついに保さんと会えま
したよ、

周りから何処のノインだ！と突っ込まれそうですが気にしません。

それにしてもあの保さんが愛らしい顔していて目の前にやって来て、
「君と友達になりたい」って、どんな冗談かと思いましたよ。

前世での自分と保さんがサングラス姿で街を歩くと、渋谷や歌舞伎
町でも、

混んでいる道でも何もしていないのにモーゼみたいに人が避けてい
ったくらいなのに。

まあ向こうも前世での見た目の欠片もない可愛くなった私が、
「僕なんかで良ければ友達になって下さい。」発言に笑いそうだったのが。

懐かしい、早く保さんに突っ込みたいし積もる話もしたいがどうすればいいか。

「知りあつてすぐに友達になれてよかったは、子供達だけで話したいでしょうから、

孟高、文優君を貴方の部屋に案内してあげなさい、あとで部屋にお茶と菓子を持っていかせますから。」

“ おお、ナイスアシストよく分かっているぜ保さんのおばさん”

ギロツ

一瞬だが今にも射殺さんとはかりに睨まれたぞ、心を読まれたのか！？

保さんに手を引かれて玉座の間を後にし保さんの部屋へ。

「今時、劇団ひまわりでもあんな大根役者なガキはいないでしょう。あと、おばさん怖すぎ、保さんのおばさんと思ったら視線だけで殺されそうだった。」

保さんの部屋について周りに人がいないからいつもの喋りにする。

十年以上の付き合いであり笑いながら気楽な口調で喋る。

「女性に対しておばさんはあかんだろ、実際若いんだし、それにしても

自衛隊員が僕って！？“自分は”でなくて？あとおかんは宝塚か？」

「現役自衛官でなくあくまで元防医卒で今は医官ではなく親の跡継いだ、

単なるしがない開業医ですよ、間違えないでくださいよ。

あと宝塚言っな〜！まあ、いつ歌って踊り出すんだと何度も思ったが。」

そんな私の発言に対しニヤニヤしながら保さんが口を開く

「うわ〜、なんて厭味、あんなでかい総合病院の後継ぎがしがない開業医って、

それ以前に今はって、死んだのもう3年以上前やんだから前世と言うべきでは。」

「保さん突っ込みが細かい。嫌味というのが金持ちなら保さんの家の方がすごいじゃないですか。」

前世トークと特攻野郎Aチームで盛り上がるが、冷静に考えたら生産性がなさすぎる。

「保さん、とりあえずお互いの知っている知識やら現状確認しませんか？」

時代がいつなのか、世界がどうなっているか話をしましょう。」

つい先ほどまでケラケラと笑っていた保さんも僕の言葉に真面目な顔になり

「そうだな、まずは現状確認をしよう、だがその前にだ。」

「・・・?????」

私が頭上に巨大な？を浮かべていると。

「姓は董、名は擢、字は孟高、真名は保、涼州へようこそ、そして久しぶりだ義弟」

「姓は李、名は儒、字は文優、真名は司、今までも、そしてこれからよろしく願います義兄」

「ああ、前世ではありがとうな、そしてこの三国志の時代でもよろしくな、会いたかったよ。」

前世で義兄弟の杯交したが、いつも笑顔な保さんが少し涙ぐみながら抱き締めてくれた。

自分もちよつと涙ぐみながら抱き締めて「会いたかったです。」

感動的なシーンですよ、普通ならば。

私の「会いたかった」の所で侍女の方がお茶とお菓子を持って部屋に来たのが、

男の子同士で涙ぐみながら抱きしめい「会いたかった」発言。

城内の侍女間で僕と保さんの関係が間違っただけでなく、

まさか、

大陸全土で売れに売れまくった伝説の大人気801本になるとは知る由もなかった。

。そんな未来を知っていたならこのシーンをやり直せたんだが・・・。

第四話、運命の出会いしちゃった？（後書き）

とりあえずこの話の主役である保と司がそろいました。

とりあえず司とかの設定は近いうちにいろいろ公表しようかと思えます。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（前書き）

仕事中になんでこんな物を書いているのだろうか、明らかに仕事で悩んでいるんでしょうねえ。

みづらじゅん言うところのDS（どうかじっていいもの）ですよ、とりあえずそんなDSな作者によるDSなお話が始まります。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？

—保—

地獄絵図です、ただいま隴西郡の城の玉座の間が地獄絵図ですよ。

あつ、どうも、やっと親友と合流出来たはいいが嫌な予感しかしなかった董擢こと保です。

玉座の間が地獄絵図とは？何があつたか説明をしますと。

原因は先日、侍女に見られた私の部屋での出来事についてですよ。

私としてはやっと会えた友人で、つい感激して抱き締め「会いたかった」と。

ただ、侍女の方々に前世での親友であり義兄弟であり一緒に転生したが、離れ離れになっていてやっと会う事が出来たなんて事を知っているわけがなく。

今日初めて会ったのに泣きながら抱き締めあい会いたかったよ発言する私達

侍女達が皆鼻血を流しながら「ここはなんて桃源郷」と遠い目をして呟く独り言に殺意が。

どうやら私と司ちゃんは4歳目前にしてシヨタＢＬ野郎と侍女達に認定されたようで。

私としましてはこの問題を早く解決したいのと、侍女達のリストラを検討したいのですが。

あと私だからリストラで済みますが、これが正史の董卓だったらどうなっていたでしょう。

侍女達の解雇とか話がそれているので話を本筋に戻しましょう。

シヨタＢＬ野郎扱いと既にこの段階でかなり死にたい要素満載ですが、

侍女達だけならまだしもお互いの親に知られてしまったのが問題で。

これが私達がもし本当にシヨタＢＬ野郎同士なら当人達の性癖の問題であります。

あくまでも侍女達の勘違い妄想、困った事に親達はエキサイト&エスカレートで罵りあいですよ。

「純粹だつたうちの保君を返せ、この呪われたクソガキめえ！」

ついには冷静沈着不動の董君雅様と世間で言われている母上が斬馬刀で司に斬りかかろうと。

“駄目えええ、勘違いで私の義兄弟を殺しちゃ、って、間に合わないー”

母上の攻撃から司を守ろうとするが明らかに間に合わない、これでは思ったら。

ガギイイイーン

凄まじい金属音が玉座の間に鳴り響く。

母上の斬馬刀が弾かれている、斬馬刀の横つ面を司の母親である李肅さんが、右斜め下から切り上げるように振り抜いたモルゲンステルンの打撃によって。

突っ込みたい、何処から取り出したんだモルゲンステルンなんか！？

大体あれは13世紀以降のヨーロッパだろう武器として誕生したのは！？

『兄ちゃん野暮な事は言いなさんな』

神の声ではないが、なんか謎の警告が来た。

警告を無視して突っ込もうとすると。

『その突っ込みをすると貴様は苦しむぞ！李儒の母親役で何故李肅なんだ！』と、

李肅も董卓とは縁深いが何でもありの世界でもやるならば李儒の兄弟だろ、と言われたら。』

うん、この警告は素直に聞いた方がいい、警告を無視するとこの話が破綻という惨劇が待っている。

『安心せい、既に最初から破綻している。』

うるさい！！とりあえず、この天の声の言う事は聞いておこう、変な声だが。

“言葉でなく心で理解できた！”

母親達の戦いに戻そう、うん、ほんの数行程何も無かった事にしよう。

母上の攻撃をはじいた李肅さんが吠える。

「それは私の台詞であゝ、和が私の空を奪っただけでなく、お前の息子は私の大事な司を奪おうとするなんて、この薄汚い泥棒猫親子め！！！」

“何を・・・何を言っているのか分からないよ、カヲル君”

自分の理解の範疇を越える李肅さんのあまりにもな発言に何処かの14歳の霊が降りてきたよ。

こうなったら取る手段は一つ、現実逃避だ。

“母上いけー私の心が悲鳴をあげているから、とにかく母上が勝つて話を無理矢理まとめてくれえ。”

「貴様が勝手にうちの旦那に色目を使っているだけだ。泥棒猫は貴様の方だ！」

母上の斬馬刀が今度は右から左への横薙ぎ、それを李肅さんが伏せて回避する、

そして、立ち上がるのと併せて母上に向かって突進、斬馬刀の弱点である懷に飛び込もうと。

母上危うし！？と思ったらこの動きを読んでいて、横薙ぎ中に握っていた柄から手を離す、

手から離れた斬馬刀は一直線に飛び、轟音をたて壁に突き刺さる。

問題は斬馬刀が父上の顔面ギリギリ数cm脇に突き刺さっていたのが。

泡吹いて失神する父上。

戦いに目を戻すと母上は斬馬刀を振り回した際の遠心力を使って回転し、

懷に飛び込んでからの一撃とした李肅さんの攻撃を避けるだけでなく、

最盛期のフランシスコ・フィリオ以上の鮮やかな上段回し蹴りを決めた。

見事に決まった、蹴り決まって李肅さん吹き飛んでいったし。

「やったか!？」

母上その発言はいくらなんでもフラグです。

母上の見事なK・O劇を見ていた私、ここでふと私の横にいる司を見るとニヤリと黒い笑顔を。

これはヤバい、本能が伝えているこの馬鹿場を更にかき回すつもりだ。

- 司 -

私が黒い笑みを浮かべた事を保さんは気づいたようで、ただ、もう遅い。

「お母さんも董君雅様もやめて下さい、僕は保お兄様のことが・・・フガモガ」

「冗談でもヤメローー!」

久しぶりに会ったんだ、少くくらは保さんを振り回してあげないといけない。

保さんが僕の口を塞ぐが時既に遅し、途中までだがバツチリと母さんの耳に届いたな。

危険な賭けではあった実際母さんを倒した董君雅様が振り向きこち

らをロックオンしているし。

「排除、排除、排除、保君に近づく悪い虫は排除する」

怖いドス黒いオーラが漂っている、だが、母さんと僕の絆を舐めてもらっては困る。

「た、た、ターミネーターじゃないんだから、なんで立ち上げれるんだよおお。」

保さんの声に震えが混じっている、董君雅様が後ろを振り返るとそこには。

ペツと血の混じった唾を吐きフラフラになりながらも立ち上がる母さんの姿が。

「なんや今のが攻撃なんか、気合いの入った社交ダンスか、涼州者に洛陽で磨きぬいたほんまもんの暴力ちゅうもんを教えちゃう」

母さんが立ち上がったのは嬉しいが、何処の地域の人間だかわからない口調になっている、

あと気になったのはこの時代の人間である母さんが社交ダンスを何故知っている、まあいい。

「母さん、たとえ上司でも負けてはいけません。」

母さんが一瞬だけだがニヤリと笑ったのが見えた。

立ち上がったばかりの母さんに対し董君雅様が間合いを一気に詰め
トドメだと、

右ストレートを母さんのボディーにねじ込んだ・・・はずだった。

母さんは右ストレートをギリギリで避けてわき腹と左腕で挟んで抑
えていた。

「捕まえた」

母さんは空いている右腕で董君雅様のうなじの辺りをつかみ避けれ
なくしてから、
いったん上半身を背中側に思いっきりそらしてから頭突きを。

渾身の一撃が相手の顔面にめり込む、さらに一撃で終わりなく、更
にもう一発、もう一発と。

何発入ったのだろうか落ちていであろう董君雅様、それにたいし
血まみれだが母さんは笑顔で

「司が応援してくれる限り母さんは無敵だ」

そう言って母さんは倒れた。

- 保 -

お互いの母親の戦いがダブルK・O・勝者も敗者もない今回では
一番優れた答えが出た。

普段ならこれだけでよかったのだろうが、私も決着をつけないといけない。

「司くん、此処まで問題を大きくしたんだから覚悟は出来ているよね。」

逃げられないように右肩をがっしり掴む。

「争いは何も生まない、復讐なんて達成してもむなしくなるだけだ」
司君が復讐を諫めようとする、言いたい事はよく分かる、でもね。

久しぶりに会えたから司ちゃんもテンション上がり過ぎてしまつて、ついなんだろうね。

だから私も、つい、復讐をしよう。

とりあえずこれだけは言っておかないと。

「今からブツ殺しに行くぜ、小便すませたか？神様にお祈りは？
部屋のスミでガタガタふるえて命乞いをする心の準備はOK？」

まあ、とりあえずは死刑宣告したし、いきますか。

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア
アリアリアリアリアリアリアリア、アリーヴェデルチ」

実に空しい戦いだっただ、そして、この後どうすればいいのだろう、父上は気絶、母上はノックダウン、司はアリーヴェデルチ、玉座の間は廃墟と化している。

仕方がないからこういふときは、そのうち私は考えるのをやめた。

ちなみに、この司の悪ふざけからはじまった戦いは保と司のシヨタBL評価どころか、

お互いの家族を混ぜた壮絶な愛憎劇と侍女達の噂話で面白おかしく脚色され、

瓦版で、本で、お芝居で千年たっても語り継がれる名作になるとはこの時の保は知る由もなかった。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（後書き）

書いていて思った、酷過ぎるそうでなくても酷いが、
思い付きを文章にはいけないと反省するばかりであります。

まあ、笑ってくれる人が一人でもいてくれたら幸いです、
ご意見、感想お待ちしております。

第六話、鎧誕生秘話（前書き）

今回はいつもよりは少しだけ真面目要素のある回です、とはいえ相変わらずふざけた内容ですが。読んで笑ってもらえたら幸いです。

第六話、鎧誕生秘話

――司――

今現在執務室ではこの涼州を統治する最高幹部が集まって会議をしております、

口調がなんで説明口調なんだって？それは言わないお約束です。

「前に話をしていた兵募集についての件はどうになりましたか？」

まずは太守として董君雅様が、筆頭軍師である池陽君様に。

「雇用対策も兼ねての兵募集ですが予算との兼ね合いもあり、希望人員の三分の一の千名の採用が適當かと。」

「軍を率いる人間としては各部隊の希望人数を出した故の三千人だが、

兵が多くても練度の問題も、100万とかで力押しするのでないから少数採用もやむを得ない。」

「財政面としましては、千人程度で宜しいかとたしかに理想は三千名ですが。

現在は羌族との関係も良好で、他州とのいざこざもなく兵数がさほど必要ないかと。」

「警備部は今の意見に反対です、兵の数が今は足りていても明日は？ならば明後日は？と将来は分かりません、実際州内でも治安悪化の報告が、

警備部が募集するのは、今回の兵はただ戦争で戦うだけの兵ではなく、

街の区画整理案とあわせて治安維持での警邏要員として役割が。」

警備部責任者は一旦話を止め、一口だけ茶をすすり話を続けていく

「また兵の維持費ですが当初の負担よりかなり減るか」と、

試験的に運用しております軍の演習を兼ねての隊商の護衛任務ですが、

隊商には護衛の対価として兵糧の一部負担をしてもらうことで、
部隊は演習出来、隊商及び軍どちらにも利益があります。」

「軍師として疑問が、今までの兵より費用をかけないですむという
が、

今回がたまたま上手くいき負担をおさえられた可能性は？」

「軍師が言われたように最悪を想定していくべきなのではないかな
?と。」

各々の担当する職務に誇りがあり熱い議論が続くなか、ここで和様が

「色々な意見がありますし議論無き所に発展はないですから、

とりあえず議論は別として、保ちゃん司ちゃん子供らしく話なさい。

「

「和の言うとおり、貴方達は自分達の可愛さが分かっていないの?」

「母上、なにも今言わないでも、ねえ父上からも言ってください。」

「ほら保も言っ「貴方は黙って下さい!!!」・・・はい。」

真面目な議論が延々と続いているなかで途中から変な発言が。

あつ、どうも挨拶が遅れました李儒文優こと司です、

この間まで3歳でしたが、少しだけキンクリして5歳になりました。

『とりあえず歳をとらせたのは今のままでは話が進まないからだ。』

変な声が聞こえてきました、前に保さんから教えていただいた天の声でしょう、

これを聞いたらその件については触れてはいけないとのことですので、話をかえましょう。

なんで5歳児である私が執務室での政務を知っているかというとはい、私も保さんも文官としまして参加しているからです。

これだけでも常識的に考えたならばあり得ない事態なのですが、和様が保さんを膝上に座らせ抱き締めていながらで、私が母さんの膝上に座らせられ抱き締められているというのが。

保さんは会議の時に「どうしてこんなことになったんだ」とよく呟いています。

まあ、原因は前回のアレがきっかけですね。

私からしたら子供の可愛らしいイタズラだったんですが。

あれ以来僕は和様に、保さんは母さんに目をつけられたと言いまし

ようか。

監視の目がつき二人つきりになるのが許されなくなりました、冗談ですよと言っても一切話が通じない事態になりました。

「保君に近づく悪い虫は」と和様に殺気発しながら言われると怖くて。

保さんとこの時代についてや未来技術の発明についてこっそり話し合えなくなりました、

ならば仕方ないと当初の予定では成人してからですがカミングアウトしましたよ。

小学校にも行っていないような年齢の子供が真剣な顔で話をしても、よくて子供の作り話と一笑にふされ、悪ければ頭がおかしいと。

最悪牢屋送りなり斬首の可能性があるかもと気が気でなかったですが、

「貴方は私がお腹を痛めて産んだ子供に違い不大的ですから安心なさい、

今まで誰にも言えなくて辛かったでしょうね、でもお母さんに秘密を話してくれてありがとう。」

言われて母さんに抱き締められた時は母の胸でワンワン泣きましたよ、

保さんも空様、和様に抱き締められて泣いていました。

それだけならば良い話でしょうがそのあと二人に説教が待ち構えていましたよ。

「お母さんになんで話さなかったんですがそんなに信用有りませんか？」

一番辛いのは、お母さんに正直に言わず嘘をついていた罰として、こちらでは子供なのだからお母さんに甘えなさいと言われたのは。

ダメージでかいです、四捨五入すると四十になるおっさんが、可愛い子供を一生懸命にやって媚を売るような仕草をするのは。

おでんと日本酒がしつくりくる年齢のおっさんがですよ、目をつるつるさせて上目遣いしたり甘えるんですよ。

どんな羞恥プレイですかまったく。

この姿をビデオカメラで撮影されて披露宴で流されたら会場で即自殺ですよ、

まあ三国志の時代でビデオカメラが存在しないので助かりましたが。

――保――

この世界に転生してから私の考えでは話すつもりがなかった秘密だが、

司の悪ふざけをきっかけにまさかお互い親に話す羽目になるとは。

母への隠し事が相当後ろめたくいずれは話したいと言っていたが。

司は前世で家族という感じがしない家庭に育ったから、

今の生活が嬉しくて仕方無い、本当の親子になれたと笑顔で語って

いたのが。

こういう話をするといひ話だが、やはり司には色々とお返しをしてあげないと。

羞恥プレイがとか言っているがそれはこちらの台詞だと、だいたいアイツは性に関しての器のでかさが半端でないのだから。

羞恥プレイなんて言っているが、それで喜んでいる変態に違いない、何故ならば私は奴について神から聞いているのだから。

転生直後に司がオムツかえられる事に喜びをみいだしていたのを、オムツプレイOKな人間が子供演じる羞恥プレイくらいいくだと。

転生、未来の知識はお互いの家族しか知らない秘密としましたが、それにしても技術を伝えるのがこれほど難しいとは。

私達が知恵を出して政務を執り行うにはいささか若すぎるのが、おかげで、私達が仕事をする時は家族しかない時なのが。

未来の技術を伝えるときなんか大変ですよ。

今日まで思い付かなかったものを発明するわけですから、鑑の時とかやりましたよ、外で私が子供演技して鑑を作るまで。

「お母さん、お馬さんに乗れないよ。」泣きつく演技

←

「涼州の人間が恥ずかしいぞ」厳しく怒った演技

←

「お母さんごめんなさい、でもお馬さんに乗れなくて、足かける道具があれば簡単にお馬さんに乗れるのに。」甘えた口調で

←

「仕方ないな保は甘えん坊で、仕方ない望む物を作ってあげよう」
優しい口調で

←

「お母さーん、お馬さんに乗れたよー、お母さんありがとう、大好き」抱きつきながら

←

「これは馬を取り扱うのに便利ではないか、では軍で採用だ、保障いぞ。」

この一連の流れが必要だそうで・・・。

「鎧の詳細な図面とかだけでいいのに、昼に描くからそれを夜に渡せば」と伝えたが。

私何も間違えたことも変なことも言っていないく常識的発言ですよ。
まさか母上が絵コンテまで用意し更に演技指導まであるなんて。

嫌だと言ったら泣きだし始めた、仕方ないからやると伝える。

直前になってやはり嫌になってゴネたら「鎧なんかいらない」と言い出した。

父上がさすがにそれはと注意しに行ったら、どこで覚えたのかマッハ突きでぶっ飛ばされていた。

頭と胃が痛い、助けてくれ……。

あと司が陰からこちらを見ていてニヤニヤしていやがった殴りたい。

—和—

保ちゃんから聞いた鎧を作る為に保と打ち合わせをする。

鎧を発明までに不自然な流れがないか、完璧にする為一連の流れを教える。

私の考えた完璧な鎧が出来るまで物語を保ちゃんは要らないと言ってきた。

「保ちゃんが反抗期だなんてお母さん生きていけない」
と泣いたふりをしたら保ちゃんが「やりますから泣かないでください」と。

本当に保ちゃんは何が不満なのだろうか、この完璧な脚本が。

保ちゃんの可愛さを皆が知って、私は厳しくも優しい母親になって、

鎧が出来て騎馬軍団は強くなるし、保ちゃんが私に“大好き”と言ってくれる。

当日になつて保ちゃんがやはりやりたくないと言い出した。

「保ちゃんがやらないならば鎧なんか要らない」と言ったら空に怒られた。

保ちゃんに大好きと言ってもらえない辛さが空には分からないのだろうが、意地悪をする空、頭にきたから保ちゃんが名付けてくれたマッハ突きでぶっ飛ばす。

保ちゃんは良い子だから喜んで脚本通りやってくれた。

保ちゃんに抱きつかれて「お母さん大好き」と言われて鎧も出来た。幸せな一日だったと布団に入る。

夜寝ていたら警備兵に起こされた、練兵場でボロボロになった空が見つかったと、族が侵入したのだろうか城内の警備を厳重にするように指示する。

第六話、鎧誕生秘話（後書き）

相変わらずどうしようもない内容ですが読んで笑っていただけたら幸いです、ご意見感想お待ちしております。

それにしても、和を出す話が勝手に出来上がるのは何故だ・・・。

第七話、発明するのはいいけれど（前書き）

今回は前回に続いて発明に関する話を。

とりあえず恋姫原作キャラをそろそろ出したいんですが。

第七話、発明するのはいいけれど

—保—

とにかく司にギャフンと言わせたい、まあ今時ギャフンはないだろうが。

そういえば何故ギャフンという擬音が誕生がしたのだろうか？

ボインという単語を大橋巨泉が発見した時のように、もう、これはギャフンとしか表現出来ないような何かがあったのか？

どうも、くだらない事に必死で悩む董家長男の保君です。

まあ、なんでいきなりこんな話かと言いますと前回の件ですよ。

単なる未来知識保有というイカサマチートで鑑作りましたが、鑑が出来るまでにさんざん母上に振り回され続け泣かされましたよ。

それに対し親友である司はさすが転生先が“あの李儒”ですよ、一連の流れに困惑する私を見て助けずニヤニヤするんですから。

伊達に弘農王毒殺しようとする人間ではありません。

まあ、司に嫌味を言ってもニヤリと嫌な笑顔を見せて、

「親子の触れ合いを邪魔したくなかっただけです」と言われておしまい。

私の鑑の時みたいにくそ恥ずかしい寸劇やって色々發明しろよ、なんて思ってたやらせても司は動じなかった、普通にこなされた。

司はこの世界で絶賛マザコンだから母親が喜ぶならば平気なんだろう、変態め。

乗馬後に馬の脚を見て「お馬さんも靴が無いと蹄が痛そう」と目をうるうるさせて親の前で心優しき子供の演技を普通にしゃがって。

それにしても寸劇やって可愛らしさアピールからの發明って、訳のわからん流れ作った奴出てこい説教してやると叫びたい！

まあ、母上が出てくるだけなんだが。

説教したいがどうせ泣かれて私が悪くないが謝っておしまいと。

「理不尽だあああー！ー！」

分かっている母上の涙はテレビでの上島竜兵の技と同じで、こちらが見ていない隙に涙ぐむという、見せるならぬ魅せる技なのが。

分かつちやいるが男はやはり女の涙には弱いという生き物で。

うん、女で失敗する人間だな、こんな発言しているようだ。

「保さんは女で失敗しませんよ、だってそれ以前に。」

いつのまにか親子寸劇から戻ってきた司がいた。

「心を読むなよ。」

「こういう時のお約束、口に出ていましたよ。」

そんな馬鹿な！？、これが“そんなバカラ！！”ならば、
バカラ賭博中に警察に踏み込まれて捕まった芸人だったな。

「なんか下らない事考えていますね、顔に出てますよ。」

「そっか、まあいいや、ハマらない理由は？」

「私も保さんの家も親が息子依存症と言っているくらいの溺愛」

だろうなあ、連れていくのが才色兼備家柄性格完璧な女でも、
「うちの子は渡さない」の一言でおしまいだな、しかも運が良くて。

悪ければあの斬馬刀の出番だろうな、しかも、母上のことだから、
ゼンガー・ゾンボルトみたいな名乗りをして一刀両断にと。

「我が名は君雅！董君雅！！保ちゃんに近づく悪を断つ剣なり！！、こんな感じですかね？」

あり得る、普通なら絶対にあり得ないが母上なら殺りかねない。

やりかねない、ではなく“殺り”かねない、此処ポイント、次のテストに出ます。

「なんであんな悪い意味で個性的なんだ。」

「そりゃ作者の都合でしょ？」

「いや作者も気付くと母上パートが勝手に出来上がっていると。」

「「はあつつつ・・・」」

お互い困った母親だなと子供らしくないため息をつくのだった、とりあえずメタな発言は無かった事として。

――空――

お久しぶりです皆さん、同じ夫婦なのに全く出番が無い空です。

うん、真名の読みが空^{そら}ではなく、やはり空^{くう}だね、家庭の中で話の中で存在感がない空気並みの扱いと。

こんな未来を予想して今は天国の両親は真名をつけてくれたんです

ね、

なんて先見の明があつたんでしょうか、未来予知にも程があります。

グスツ、泣いてなんかいません。

私の涙は置いておいて、あと、やはり泣いてたという突っ込みはなしで。

今現在の涼州の状況とか開発具合について話をしますか。

まずは軍事から、

保達に教えられた鎧で涼州馬を活かした軽装弓騎兵の強化。

例えば軽装騎兵に必要な技術として一撃離脱戦法として、騎乗しながらの後方射撃のパーティアンショットを教えられましたよ。

訓練に教わった流鏑馬、笠懸を採用、騎上射撃の練度が上がりました。

司君が言うには「この時代最強の騎馬軍団が出来た」と、軍師としては大袈裟と思ったが、保達の知る世界の歴史では、約千年後に五胡達の子孫が短期間で世界の大半を支配したと。

まさか五胡の団が漢だけでなく大秦近くまで支配したなんて、

だとしたら、この騎馬軍団が世界最強というのもあり得ると。

さらにこれらに関する事で、流鏑馬、笠懸といった射撃練習で保が、

「本当は犬追物もあつた方がいいが殺さないとはいえ犬好きとしてやりたくない、

必要な訓練は分かるが犬を飼っていたから愛犬でなくても抵抗が。」

こんな発言をしていました、そんな保に対して司君が、

「犬好きな女性とのフラグが今の発言でたったね」と謎な言葉を。

一方、和は保に「犬に優しい保ちゃん、なんて可愛いのに。」と、これだけならばまだしも「犬が駄目なら虎がいるじゃない！」

「何処のマリー・アントワネットの発言だよ！」

と口を揃え保と司君が謎な突っ込みを叫んでいました。

まあ保大好きな和にかかれば、保の為ならなんだってと、今から騎乗練習よと、弓片手に虎を狩りに一人で行くとは。

この後、うちの騎兵は虎退治出来ないと一人前と言われない、あり得ない強さの軍団になるとは思いませんでしたよ。

まあ、飾りや服の材料として使えるからと虎の毛皮、漢方の精力剤として性器が高値で売れ経理としては助かりましたが。

あつ、軍事に関する雑談で保が言うには司君は天才との事で、私からしたら保の頭の回転の良さや知識だって恐るべきだと。

司君の凄さという点で、弓もだが女子供でも簡単に撃てる弩があった方が楽だと言い出し、

元戎という連射出来る弩を発明したことが保には驚きだったようで。

保が言うには「存在したというのが構造不明な物なのに、どうやって作ったんだよ！だから本物の天才は嫌になる。」

“ごめんなさい保、お父さんは泣いていいですか・・・？”

二人には未来知識があるとはいえ凄い発明を息するようにされると。

それなのに保が卑下するとそれ以下なお父さんの立場は・・・。

—保—

なんか父上が涙ぐんでいる、何かあったのだろうか？

父上に軍師として知的好奇心が刺激されるだろうと、釣り野伏せ、車懸かりの陣、

ハンニバルなど歴史的な戦術やら武将やら教えてあげることにした。

まさか父上が「保がいれば僕は要らない子なんだ――！！」
と泣きながら叫んで母上の元に辞表を出しにいくなんて。

まあ筆頭軍師が子供に凹まれ辞表は洒落にならないと、
説得されてしまったよ、母上の肉体言語ですが。

――司――

「足りない、足りない、とにかく足りない！！！」

ついつい叫んでしまった。

保さんと私が中心となって進めている涼州最強化計画が進まない、
時間が足りない、人手が足りない、予算が足りない、ナイナイ尽く
し。

軍事技術とならば黒色火薬、鉄砲、大砲、方位磁石、
大陸全土の詳細な地図作成、細作網を大陸中に広げたり、
バリスタやら投石器といった攻城兵器。

いくら予算と時間があっても足りないのが、予算が。

保さんが進める、商工業で莫大な利益をあげているが、

うん、普通ならば十分すぎるどころではない利益なんだが。

とはいえ軍事、政治、商業、工業と至る部門で出ていく額がでかいのが。

しかも、困った事に涼州は偏狭なのに他の州より治安が良く景気が良い、

商売人だけならまだしも他の州から野盗とか流入するのが。

そうでなくても忙しいのに、子供が過労死しそうなほど忙しいってどういうこと。

とりあえず捕まえた野盗は取り調べ、経済難や悪政の被害からやむを得ず盗人になったなら、

勿論殺人、強姦等の重犯罪していないが条件ですが死刑ではなく懲役刑を。

そして牢獄内で建築など技術を教え出所後の働き口の問題を無くすようにしたりと。

それでも野盗が流入してきたり治安が悪化した時は皆叫びましたね。

そして、保さんが遂に壊れました。

「こうなったら見せしめにヴラド・ツェペシュ方式だ！……犯罪者は生きたまま串刺しで州境にそれを並べるんだ！……」

流入する犯罪者は減るが商売しにくる商人も減るよ・・・。

本来は私と同じくボケなんだが今この作品では貴重な突っ込み役なのに、

まして、ボケである僕が突っ込みというかストッパーになるとは。

「保さん帰ってきてくれーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

第七話、発明するのはいいけれど（後書き）

前書きにも書いたがそろそろ恋姫キャラを出したいなと思ったはいんです、

ただ問題は今現在黄巾党すらまだまだ先なので出てきても赤ん坊とかなるのが。

それでは駄目だな、ならばどうするかと頭を悩ますばかりです。

第八話、天水からの刺客（前書き）

やっと恋姫のキャラを出せましたよ、いや、これを出したと言って
いいのだろうか。

詐欺だと言われても仕方がないレベルですいません。

第八話、天水からの刺客

—保—

三国志の世界に転生したはいいが涼州隴西郡から出た事がない為、狭い世界での生に慣れ過ぎて正史ではなく外史なんだという事を忘れていましたよ。

まあ、両親の性別が入れ替わっていると、私の存在や、李肅、李儒親子とかも酷いが、でも、そんなのが当たり前の狭い世界での生活ですよ。

あつ、名乗り遅れました董家長男の保です。

前置きでうだうだ言っていたのは今東屋にいて驚かされていたもので。

涼州に被害を出す？や羌への対策の報告で母上の友達がやって来たのですが、ちっこくて凄く可愛い現代だったらアイドルに余裕でなれそうナルツクスの娘さんが。

こんな可愛らしい人があの馬騰寿成だとは。

しかも、この人が馬膾と驚いていると、いきなり

「私はとお姉様の親友だから、真名は琅ろうかん？っていうんだけど真名交換しよう」

といきなり言われたのに更に驚かされた。

会って10分もたたずにフランクに真名預けて来るとかなんだこの自由さ。

自分のどころか娘の馬超さんの真名も預けると言いだして、母上が真名をなんだと思っっているんだと怒ったら謝っていたが。

どうやら母上と同じ年という事だが、そうなると29歳でこの見た目に喋りとかって反則だろ。

背は150cm未満？の小さな体で、栗色の長い髪をポニーテールにして、

背だけでなくちっちゃな可愛らしい顔に不釣り合いな太い眉、

年齢的にはアウトだが柔らかい言い方で成長途上という感じな胸、ギロツ

“怖っ！！！！！！” この世界の人間は心が読めるのか、めっちゃ睨まれた、ちびりそう。

ちびりそうな恥ずかしい事態を無かった事にして話を元に戻しましょう。

鮮やかなスカイブルーの上着に胸元にはオレンジのスカーフ、真っ

白なショートパンツ、

そして足元はスニーカー、うん突っ込まないぞ突っ込んだら負けだ。

この中学生と言っても通じるような可愛い見た目でピョンピョン跳ねるような動き。

何、この合法ロリな生き物は！？これで三十路直前の子持ちって。

「ええい連邦のモビルスーツは化け物か！」

あまりの驚きに大佐になってしまったよ。

ＡＶとかで「女子校生」なんてタイトルので女優のセーラー服に無理なのがあるが、

うん、ガチでいけてしまうな、年齢上問題ないがビデ倫審査通るかな？

体は子供、頭脳は大人のコナン君と同じですよ、

『お前と司なんか精神は大人とおり越しておっさんだろ！』

うん？今だれかに突っ込まれた、天の声か？

そういえばコナンで思い出したが昔ＡＶのタイトルで「チン探偵ポオン」ってあったらしく、

キャッチコピーが「見た目は子供、アソコは大人！」というのが、誉め言葉としてどうしようもないな！と笑ってしまったな。

「何か今そっちの方向でどうしようもない不快な思考を感じたよ」。

「

私の方を見ながら可愛らしく言っているが殺気だ漏れなんです、こっちは見ないで。

つつい母上と見比べてしまつ、琅？さんが若すぎるだけで母上は年相応ですが、
まあ、最近母上は太守の仕事が大変で疲れて老けて見えると愚痴っていたが。

「保ちゃん、何か言いましたか？」

はい、先程の琅？さんよりも濃密な殺気が飛んできましたよ、ちびつと漏れちゃったよ。

「な、な、な、何もないです母上」

よし！ちびったことは無かった事にしよう。

母上は若干ウェーブのかかった薄紫色の腰まで届く長い髪に、丸い輪郭に少しつり上がったキツイ感じの目付きに細い縁無し眼鏡、琅？さんの可愛いとは対照的なクールビューティーという見た目が。

知的眼鏡いいねえ、って、実の母親に対して何を思っているのです、ようか私は。

「保ちゃん、あとで一緒にお風呂に入りましょうね。」

急にニコニコした母上、母上の背景が一瞬お花畑になっていたね、
とはいえ、

何を言っているんですか！？今、言う事ではないよな、あとお風呂
一緒に恥ずかしいです。

母上がシユンと落ち込んでいる。

琅？さんが何があった？と言う風に首をかしげて、父上は何となく
わかったのか苦笑している。

それにしても琅？さんなんでまた馬超を抱えているの、あの錦馬超
がまだ赤ん坊ですよ、

産まれてまだ一年たっていないよね、なんで乳飲み子を連れてきて
いるの？この人は。

うちや司の親みたいに親馬鹿ならぬ馬鹿親で子供自慢なのだろうか？

自慢したくなるのも分かるかも赤ちゃんだが琅？さんの子供らしく
凄く可愛い顔してる。

ただ琅？さんの遺伝子をしっかり継いだ為か赤ちゃんとは思えない
立派な眉毛が。

琅？さんが馬鹿親として子供自慢で来たのなら良かったんだっ
たかなあ……………。

―琅?―

?がまた軍団で州境の村を襲ってきたけど派手にやり返してあげたから、
当分の間は襲撃は起きないですと報告しに隴西のお城までやってきたの。

本当は普段天水にいて会う事がないから報告という形で久しぶりに
和お姉様に会いに来たの。

和お姉様も私が隴西まで報告しに來ただけとは思っていないみたい
だけど、
普段冷静沈着なお姉様や空お兄様が私の考えている事分かっている
かなあ・・・ニシシ。

?の件の報告は名目だからと分かってくれているから城の東屋で会
ったんだけど、
私が翠を連れて来ているから氣を使ってくれて玉座の間ではなく、
氣楽に出来る東屋にしてくれて、お姉様優しいんだから。

東屋に着く既に和お姉様に旦那さんの空お兄様、それにお姉様の自
慢の保ちゃんがいいたの。

今日は保ちゃんに要があつて來たきたから、会っていきなりだけど、
お姉様とは親友だから保ちゃん真名を交換しようと言ったら驚いて
いて可愛い。

あつ、それでなんだけど、和お姉様ったら酷いの

「私と琅？は親友ですが、いくら私の子供であるとはいえ、初対面の保にいきなり真名を預けようとするなんて真名の重要性を理解していないの。」

むー、和お姉様は頭が固いの、それだけならまだしも。

「まだ孟起ちゃんが産まれて間も無いのに天水から連れて来るなんて何考えているの。」

用件を話していないから仕方ないけど、翠連れてきたのは意味があるからなのに。

「あつ、説明する前にお姉様とお姉様の家族ならば、孟起でなくて真名の翠って呼んであげて。」

ゴチーーン

痛~~~~いお姉様が本気の拳骨をしてくるなんて、あまりの痛さに涙がちよつと出ちゃった。

「琅？いい加減にしなさい、いくら貴女の娘とはいえ勝手に真名を預けるなんて。」

和お姉様が凄く怒っている、こういう時は謝らないと大変な事に。

「お姉様ごめんなさーい」

お姉様が仕方無いという感じでため息ついて真名の件でのお説教は

終わって助かった。

それにしても隴西にきた目的である保ちゃんを見てみるけど面白そうな子供なの。

初対面だからとはいえ、人見知りなのかこつちを値踏みするかのよ
うに観察していたり、
何か私を見ながらすぐく失礼な事を考えているみたいだったりして
いるようで。

でも、私が保ちゃんをじつと見つめてみると急に照れて目線そらし
て可愛かったり、
6歳なはずなのに行動に子供っぽさが無くてやけに大人染みていた
り変な子供なの。

保ちゃんは3歳までに読み書きとか学び終えていて、今は孫子とか
を勉強しているなんて、
孫子なんてお姉様に読みなさいと言われても面白くないから嫌にな
っちゃう本なのに、凄いの。

「ゴホン」

私が考え事しているから和お姉様がわざと咳払いして注意してくる。

「今日はわざわざ天水から隴西まで？の件で報告しに来たのですか、
既に無事鎮圧も終わり報告の書簡も届いているのにわざわざですか

？」

とお姉様が直球で聞いてきた、私としてはもっと溜めて溜めて溜まりきったところで、

ドカーーーーンと爆発するように驚かせたかったのに。

仕方がないから今日ここまでやってきた理由を告げる。

春の日差しを浴びながらと心地よい気温の東屋が一瞬で北風吹きすさぶ真冬になっちゃうなんて。

お姉様が保ちゃんを大事にしているのは聞いているが、まさかこんなだなんて。

- 空 -

数日前仕事をしていると、天水からわざわざ琅？が？の件で報告しにくる、

という報告の書簡が届いた時から猛烈に嫌な予感がしていたのだが。

見た目だと年齢は全く違うが、実際は和と同じ年であり、三カ月しか誕生日が変わらないのに、

琅？は「とお姉様」と呼ぶのが、和がお姉様と呼ばれる度に不機嫌

になるのが、

和もまだまだ若いのに歳を気にするなんて。

まあ和に言わないが、言ったら怒られるのは嫌なので、君子危うきに近寄らず。

琅？が来るといつも何かしらの騒動が起きているから、当日は朝から胃が痛くなる。

産まれたばかりの孟起ちゃんを連れて報告しにやってくるというから、

確実に？の件で来たのではないのが分かるので堅苦しい玉座の間ではなく東屋でお茶しながらと。

琅？が涼州の軍事の責任者の一人であり、責任者とはいえ琅？は知らないのもので、

軍師である私の補佐職にあたる保を立ち会わせたが、なんでそんな判断をしたのかと。

結果論にしか過ぎないんだがあの時の判断をした私の馬鹿さ加減に嫌になる。

まさかあんな問題発言があるとは…………。

「和お姉様、保ちゃんと翠を将来結婚させたいの。」

ピシッと音がして東屋周辺が凍りついてしまつとは。

第八話、天水からの刺客（後書き）

馬膳さんのキャラや口調をどうすればいいか分からなかった、喋りや性格は蒲公英、戦いに関しては翠というイメージが。

分かりやすいベタな展開の話ですいませんでした。

ご意見感想お待ちしております。

第九話、保君頑張って考えてみる（前書き）

ギャグにもシリアスにもなりきれない中途半端な文章になってしまった。

相変わらずな駄文ですが、もしよろしければ読んでみてください。

第九話、保君頑張って考えてみる

—保—

皆さんは子供の頃夏休みとかで楽しい思い出はありましたか？

私は夏休みとか長期休みになるのがいつも憂鬱でしたよ。

大抵、休みになった初日の夕食の際の母親にいきなり言われるんです。

「馬乗りに行く旅行に申し込んであるから、“明日”から“三週間”行きなさい！」

事前にそんな旅行の話無し、いきなりですよ、こちらの予定関係なしですよ。

家族全員と旅行ならいいじゃない？いいえ、私一人だけで行かされるんです、

そういえば家族旅行の記憶ないですよ我が家、いつもみんなバラバラで。

ホテルや旅館に泊まって乗馬でしょ優雅なものでしょ？

自分達が世話する馬のいる厩舎の二階に毛布でくるまって寝る生活です。

当日朝集合地点に着くと日本中から私と同じく死んだ目をした子供達がいて。

着いた先は、テレビもねえラジオもねえ車もそれほど走ってねえ、あの歌が笑えない、ほぼそんな場所なんだ、そんな牧場で生活スタート

朝5時前に起きて馬の世話して、一日中馬に乗って、飯喰って、寝るの繰り返し。

辛いのは厩舎掃除、尿と糞の臭いがね、まあ人間みたいにトイレ行けないからしかたないが。

あと馬の世話している時によく蹄で足を踏まれたがあれも痛くて辛いんだ。

人間より重たい体重で踏まれるから挟まれた足を引きぬく事が出来ない、

馬の足をどかそうとしてもどかしてくれない、足を持ち上げようとしても子供の力では無理。

馬は臆病だから大声出してはいけないと注意されているから、怒鳴らないように

必死で我慢しながら馬の首筋撫でたり機嫌とって足をどかすようにしたりするのが。

馬にずっと乗っているから尻と太ももの皮がべろんべろんに剥けて痛いし。

落馬なんか最悪でしたよ、砂まみれになるは落馬の痛みで動けないは、

だからロデオとか見る度に馬鹿じゃないか、と思ったりしますよ。

あと痛いでないが精神的に疲れたのが、全国から集まった子供達の歳が違うから、
歳上で威張ろうとするのがいると嫌な序列が出来ていて、気疲れ。

実に苦い思い出だね、長期休みに地元の友達と遊んだ記憶が全くな
いし。

そういえば他にも山でテント生活二週間なんてのもやらされたりしましたよ、

今日は川で魚を捕まえられないと食料無しになるとか、

ライター、マッチ何それ？どうにかして火をつけないと生の川魚だよ、とか。

冬だとスキー、苗場とかあんなおしゃれなゲレンデではなくて、
荷物背負って山岳スキー、冬の雪山を攻める一員なの子供なのに。

ただこれらのおかげで大抵の事が辛いと思えなくなりましたよ。

乗馬やらサバイバルとかさんざんやらされたせいで三国志の世界に
来てもあまり苦勞しないのが。

三国志の時代なんて不便だろうと思ったら意外と平氣と。

そう考えると偶然なんでしょうが、私の幼少期って英才教育？、
三国志の時代に送り込まれてもやっていけるようにするための。

どうも作者・・・もとい、主人公の設定である子供時代の記憶に現
実逃避していた保です。

なんでこんな現実逃避かって言わせないでくださいよ。

馬膳様が娘の馬超ちゃんを連れて城に来たと思ったら、
母上に“私を馬超の将来の婿に”と言い出して場が凍りついたから
ですよ。

馬超ちゃんはまだ1歳にもなっていないのに早すぎ、まして私は体
は6歳ですが、
転生してますから心は39歳ですよ。

もし馬超ちゃんと結婚することになったとして式あげる頃には私の
心は還暦間近ですよ、

子供が成人した頃には下手すれば、ではなく確実に心はジジイですよ。

いきなりなんでまたこんな話になったんだ。

――空――

誰か助けてください！！

保を取られるという妻の怒りの殺気が凄すぎて気絶しそうです、
今にも琅？に切りつけかねなさそうなのが。

妻の暴走も怖いが、理由もなくこんな話がくるわけではない、何故なのか考える私。

今回の話が来たのは何故だ？

やはり羌側からなのか？

漢王朝が異民族対策をしると漠然とした指示してきたのを利用し、殺しあうのではなく異民族も取り込み融和しようとしてきたが。

こちらには羌族との混血である琅？がいるので交渉役になってもらい、

食料や家畜飼料の支援することで羌族とは良好な関係が築けている。

ただ、今は良好な関係を築けているとはいえ羌族も次の世代になっても融和政策が続くのか？

それに対する手段で羌の人間でもあり漢の人間でもある琅？の子供である孟起ちゃんと、
融和政策の指導者である董君雅の息子である保を結婚させようとした？

羌族と保で婚姻だと漢王朝は反意有りか？と難癖をつける可能性があるから。

実際、王朝の目の届きにくい遠方である涼州で異民族対策でと募兵し続ける、

それを好ましく思わない人間が洛陽に多いのが。

しかも、兵を集めながら異民族打倒ではなく融和なんてやっている、それで羌とうちの家族が縁組みとなると漢に対し反意有りなんて騒がれかねないのが。

ならば、これが羌にとっての次善の策として提案されたのか？

琅？の策だろうか？天水郡も琅？みたいな漢王朝寄りもいれば韓遂のような反漢王朝もいる、
表立ってはまとまっているが一皮むけば一枚岩でないという状態にある。

太守一族と縁組みすることで威光を利用して天水をまとめるつもりなのか？

うむ、提案された理由が分からない、では、この話を受けたらこちらの利益は何か考えよう。

羌族との安定した関係の維持、涼州に齒向かう匈奴・？対策に集中出来るというのが。

精強で名高い馬騰率いる軍団を再編して取り込めるというのも大きい。

お互いに利益は大きい計画としては荒い計画だ。

琅？は羌族との混血で羌の協力者だがやはり漢の人間である、どちらか一方にたてるのか？

和や私がいなくなった後に保が涼州を継ぐ保証はない点、保が方針転換する可能性。

だが、一番の甘さは、和の保好きを甘く見すぎたなど。

和の保好き度は、いざとなったら一人で五胡全軍を相手するとか言いかねないくらいなのに。

和を見てみる相変わらず怒りで殺気が凄いが私のように何故この話が考えているようだ。

そんな状況で肝心要の保を見ると、子供らしくないため息をついていた。

――保――

母上は今にも怒鳴りだしそうだが必死でこらえている、父上も母上もどちらもなんでこの話が出たか悩んでいるのかな？

うーん、こういう時は一旦検討するといって翌日以降持ち越しにして、

お互いの考えや今後の対策をじっくり話すべきだが、母上がその前に限界迎えそう。

私の正体を隠したいからでしゃばりたくないが早く終わらすために仕方ないやりますか。

「はあっ」

ため息をついてしまった、ため息をつくとき幸せが逃げるとよく言うが。

私のため息に両親が反応する、アイコンタクトで任せてと伝える。

伝わったか不安だったが、両親共に頷いてOKしてくれた。

「本命の案は羌への支援拡大ですか？」

馬騰さんが明らかに驚いた顔をしている、やはりそっちが本命か。

囿の提案である婚姻が成立すれば万々歳、だがあくまでも最初に無理難題を出して、

断られるたあと本命の対案として支援拡大案を出して了承させると。

まあ、よくある手段ですね、単純だが効果がある、囿を使う事で、答えは何個もあるはずなのにこれしかないと思えてしまっんだよねあ。

私をだしにされたのは面白くないので少し苛めてみましょう。

今までたんなる子供だと思っていた子が急に腹の底読んできたなんて不気味でしょうねえ。

親達も驚いている、まあ、私の正体を隠す為黙っていると思ったら私が話し始めるんですから。

ここでまたわざと可愛らしい言い方してみますか。

「お腹がすいた羌に涼州がご飯を上げたら他の子供達は羨ましがらないのかな？」

こつちに支援拡大要請するのはいいが、五胡という民族ではなく、あくまでも、漢王朝に認められなかった異民族の団体ですが、羌がこちらに近づきすぎたらどうなるか。

馬騰さんは羌出身だがあくまでも涼州の軍として戦っているだけ、だが羌がこちらに近づいてきたら他はどう思うか、まずは裏切り者から血祭りになんて事も。

「お腹すいたら涼州のご飯食べて遊んだら仲良し、でも今までのお友達と仲良くできるの?。」

あと他の民族がどう思うかではなく、羌の部族の物が涼州と組んで、他の部族と戦えるのか?

馬騰さんの表情がどんどん変わって言っている明らかに動揺している。

うちからの支援を拡大するとなるとリスクが増えることは計算しているだろうが、

見積もりが甘くないかなと、いざとなったら涼州の提案としては、今の政策と相反するが。

羌が?を売る事で漢王朝に服従したとか情報を流したり、優遇すること、

こちらではなく彼ら自身潰し合わせ弱ったところを一呑みするとか。

「白い猫でも黒い猫でも鼠を捕る猫は良い猫ですよ。」

無邪気な感じで言ってみる、だからこそ不気味に感じるだろう、単なる子供がこんな事言う、まさか太守達も同じ意見なのかと怯えているのが分かる。

会った直後の軽い感じではなくなっている馬膳さんのまといっている空気が。

私が一方的に殴り続けているだけですが、そろそろ助け船を出しますか。

「馬膳様言葉が過ぎましたことお詫び申し上げます。」

急に私が謝るから、どうすればいいんだと一瞬ボカンとしている。

「羌の支援拡大希望検討させていただきます、馬膳殿はまだしも羌の方の中には、

仲間と戦うのは辛いでしょうし、対価は？など他の部族への不可侵および貿易の交渉説得、

および牽制に協力をお願いしたいのですが。」

？などはとくに食いつくでしょう、部族としてのプライドもありますが、

今回も追い返され涼州には敵わないというのが分かっている所に、涼州だけでなく羌が説得に来れば、まして隷属ではなく不可侵と貿易という形ですから。

まあ、交渉の場に軍を連れていく砲艦外交をやるつもりではあるんですが、

争って全滅よりかは手を取って飯を食うの方が選び安いでしょうし。

馬騰さんが急に私の前に立ったかと思うと跪いて

「董擢殿への数々の無礼深くお詫びします、我が姓は馬、名は騰、字は寿成、

私の真名琅？を董擢殿にお預けします」

ふう、どうやら今回の騒動の解決の目処がついたようです、今後の異民族対策の方針もつきましたし。

問題は涼州の最高責任者である両親の目の前で、私が相談することなく、

勝手に異民族対策という大問題で話を進めているのが。

こんな独断専行したらどうなるかな、うん下手すりゃ、下手しなくても処刑されかねないね。

さてどうなるのかなあと思ったら、別の問題が起きた。

「異民族問題は目処付いたから良いけど、結婚しないの？董家も馬家も安泰するよ。」

「何故今日はいないはずのお前さんがいて、話に混ざろうとしてい

るんだ司くーん」

「休日だった母親と買い物していたが面白そうな事ありそうだからきたの、

そしたらこんな楽しい事が、ちなみに最初から見ていたから、その茂みから二人で。」

李肅さんまでいたよ、オイオイ大丈夫なのかこの城と思っていると怒声が。

「やはり我慢出来ない、どんな理由であろうと保ちゃんに近づく悪い虫は取り除かないと、
保ちゃんのお嫁さんは私なんだああああああ。」

うん、聞こえてはいけないような発言が聞こえたような・・・。

とりあえず、遂に母上が斬馬刀を引きぬき琅？さんに襲い掛かった、あつ、止めに入った父上が一撃の元に吹き飛ばされた。

どうするんだよこれ、とりあえずは原因である司をぶっ飛ばすか。

「司君すこしO・H A・N A・S H Iしないとね。」

いろいろあったが、今日も涼州は良くも悪くも平和です。

第九話、保君頑張って考えてみる（後書き）

うん、本当にシリアスもギャグも中途半端な話になってしまった、
うん、馬騰の理由も覚悟も無しだな、ご都合主義にも程がある反省
と。

ちなみに幼少期の思い出は誇張無しです、普通とは無縁だったなあ・
・・・しみじみ。

みなさん今回の話もお付き合いいただきありがとうございます、
皆さんのご意見感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5697x/>

恋姫世界で二人旅

2011年10月21日02時03分発行